

# 択捉島のさけ・ますふ化事業

八木 沢 喜 家



筆者紹介 大正2年4月、栃木県に生れる。昭和5年生涯の仕事となるさけ、ます増殖事業に就く。6年には択捉水産令の紗那ふ化場に移って昭和23年の引揚げまで択捉に住む。この間、択捉のふ化場か北海道水産孵化場に吸収されるなど幾多の島の変遷を見てきた。23年以後、虹別、北見、天塩、千歳などの支場を経て、現在北海道さけ、ますふ化場北見支場長。

当時の思い出は尽きないが、根室と島を結ぶ小さな定期船の中で、船酔いしながら荒波をわけて進む「生と死を賭した」船旅は忘れられないという。

## 目 次

- ま え が き
- I 択捉島の概要
- II 沿 革
- III 人 文
  - 1. 気 象
    - ① 天 候
    - ② 降 雨 量
    - ③ 風
    - ④ 季 節
    - ⑤ 植生状況
  - 2. 部 落
  - 3. 交通と通信
    - ① 交 通
    - ② 通 信
- IV 漁 業
  - 1. さくらます
  - 2. からふとます
  - 3. さ け
  - 4. べにさけ
- V さけ、ますのふ化事業
  - 1. ふ化事業の沿革
  - 2. 設 備 状 況
  - 3. 事 業 成 績
  - 4. 事 業 実 施 状 況
    - ① ま す
    - ② さ け

③ べにさけ

④ 天然産卵

⑤ 密漁取締

⑥ 稚魚の保護

VI 事業場の環境

VII 終戦後のふ化場

む す び

## ま え が き

千島列島は本道の東北端に位置し、南は国後島より東北方はソ連領カムチャッカ半島と対峙する占守島に至る延長約1,180km間に点綴し、大小24に及ぶ千島火山系の島嶼より成り、南部、中部および北部千島に分れ、行政上では根室支庁に属して、国防並びに漁業上重要な国際接触線であった。

択捉・国後および色古丹島の属する南千島は、1854年(安政元年)日露下田条約で日本領土となり、中部および北部千島は1875年(明治8年)以来「樺太と交換条約」により日本領となった。気候は概して霧が多く、林業、畜産および鉱業などの開発が行なわが見るべきものなかった。然し、四大漁場の一つであるオホーツク海に面し、寒流性のます、さけ、たら、かに、にしん、くじらおよび昆布などの水産物は大きな生産を挙げ、蛋白質の供給と外貨獲得に大きな役割りを果たした。水産物のうちさけ、ますは特に多く全

生産の約90%を占め、さけ、ますのふ化事業も扱ひ、国後両島において、古くより水産会や漁業会社の経営で実施されてきたが、昭和9年全道民営ふ化場の北海道移管に伴ない、北海道鮭鱒ふ化場扱ひ支場および国後支場となり、爾来、同20年8月15日の大東亜戦争終結まで大いに実績を挙げた。

筆者は昭和5年扱ひ島水産会の経営による紗那鮭鱒ふ化場に奉職し同9年以後は北海道鮭鱒ふ化場扱ひ支場に終戦まで勤務した。千島は今やソ連の支配下にあり、北方領土復旧並びに北方漁業諸対策が推進されている。

そこで昭和5年頃から終戦直後までの勤務当時の記憶を辿り、扱ひ島のさけ、ますふ化事業の状況を中心に島の環境と併せて筆者が実際に体験したことと関係者の氏名を挙げ参考にと思い啟めてみた。

## I 扱ひ島の概要

本島は行政上三郡三村より成り、南を扱ひ郡留別村、中間を紗那郡紗那郡村、北を薬取郡薬取村と称し、南西より北東に細長く、その延長は約203.5Km、総面積約3.165Km<sup>2</sup>で、東経146°53'~148°55'・北緯44°24'~45°33'の間に位置し、千島列島最大の島である。また島の中には1,000m~1,500mの活火山および休火山が南西より東北に連立し、島のほぼ中央オホツク海に面する散布山は標高1,550mあり、扱ひ富士と称せられて夏でも雨が残っている。

東部太平洋岸の海岸線は概ね断崖で、直ちに海潮の洗う処が多く、河川は直流で峡谷が深く、水勢も急である。従って、天然の良港としては単冠湾以外では見るべきものがなく僅か2~3港だけが船舶を碇繋するにすぎない。単冠湾は昭和16年12月8日、大東亜戦争の発端、真珠湾を奇襲攻撃した旧連合艦隊が作戦のため集結した処で、当時の帝国海軍の偉容が想起される。

西部のオホツク海沿岸は概して緩傾斜が多く、海岸線も長く岬角が突出して港湾が多

い。

河川の流長約40Kmの留別川を始め、紗那川、別様川、薬取川等があり、何れもさくります、からふとます、さけが多数浜上する。また別様川流域は広大な泥炭地を形成している。

湖沼はウルモベツ湖、年萌湖を始めとして大小13を数え、火山火口湖または海跡湖であるが、何れの湖にもウグイ、イトウ、棘魚、カラス貝、オシヨロコマなどの淡水魚が棲息し、さけ、ますの浜上も多しふ化事業との関係もまた大きい。中でもウルモベツ湖はべにさけのふ化場で有名であった。

扱ひ島の湖沼は昭和7年子爵田中阿歌磨氏同10年北海道水産試験場高安三次郎氏、近藤賢蔵氏および大東信一氏等によって理化学的、生物学的な面ばかりでなく、繁殖保護および生産力等を詳細に亙って調査された。

## II 沿革

千島列島は北海道本島と共に「渡り島」、 「蝦夷千島」等と称され、北海道の一部であった。1643年(寛永20年)当時西欧に伝えられた処によると、日本の東海にある島々はオランダから派遣されたマールデン、グリツセンの率いる探検船によって紹介されたのが初めて、露人の発見は1699年(元禄12年)と言われている。

ロシア人が千島列島に侵入してきたのは、東洋政策によってカムチャッカに基地を持ち、まず占守島を占領したのが始まりで、その後、漸次南下して中部千島のラシユワ島以北の諸島を占領した。しかし、当時の松前藩は藩勢も貧弱で、露人の跳梁に対して防備する実力がなく、また、何等の措置も講じていなかったため、1936年(元文1年)には得撫島以北の列島は悉くロシアの所轄する所となった。

幕府が北辺の容易でない事態を初めて認めしたのは1771年(明和8年)であって、その後1785年(天明5年)に普請役の山口鉄五郎を

湖 沼 の 概 要

湖沼名	面積	湖面海拔	最大深度	平均深度	湖沼容積	湖沼成因	透明度
	Km <sup>2</sup>	m	m	m	m <sup>3</sup>		m
1 神居古丹沼	1.0内外	約4~5	—	—	—	—	2.5内外
2 キモン沼	1.9075	9.0	3.05	2.12	4,041,000	火山火口湖	1.2
3 内保沼	2.6365	6.0	1.20	0.72	1,890,000	火山湖燈岩堰止湖	12.5
4 ウルモベツ湖	5.818	83.0	48.00	30.68	178,486,000	海跡湖	2.5内外
5 ヤンケ沼	0.2	約2.0	1.8	1.20	240,000	—	2.5
6 レブン沼	0.61	約2.0	2.0	1.29	789,000	—	2.5
7 キモン沼	0.57	約8.0	5.0	2.38	1,357,000	—	2.5
8 年蒨湖	4.065	約4.0	15.7	6.18	25,110,000	—	2.5
9 留別沼	0.28	約4.0	3.5	2.04	572,000	—	2.5
10 ラウス沼	2.081	約5.0	12.5	5.33	11,094,000	—	2.5
11 紗那沼	0.993	10.0	3.0	1.70	1,690,000	—	2.5
12 セー沼	0.3657	10.0	5.8	2.79	1,022,000	—	5.1
13 トー沼	1.358	約3.0	21.0	8.18	11,111,000	—	4.5

	P. H	生棲動物	水生植物	摘 要
1	—	甲殻類	ヒロハノエビモ ウメバチモ	
2	6.3~6.4	ウグイ	珪藻類	谷茂平氏が、ウルモベツ湖産のべにさけ卵を移植した。S8年100万粒、9年60万粒。
3	7.2	ます、さけ、ウグイ 棘魚、イトウ	センニンモ エゾヤナギモ	
4	7.0	べにさけ、オシヨコマ、ウグイ、カラスガイ	ヒロハノエビモ ササエビモ	谷茂平氏経営のべにさけふ化場がある。
5	6.8	アメマス、オシヨコマ、トグウオ	—	
6	—	アメマス、ウグイ、チカ、淡水海綿	ヒロハエビモ ササエビモ	
7	—	スジエビ、カラスガイ、ます、マルタニシ	エゾヤナギモ	
8	弱アルカリ	さけ、ます、チカ、べにさけ、ウグイ	ホザキノフサモ センニンモ、ウメバチモ、ヒロハノエビモ	湖岸に年蒨事業場がある。
9	8.1	ウグイ、イトウ	センニンモ ヒロハノエビモ	留別沼ふ化場がある。
10	7.1~7.15	さけ、ます、ウグイ	センニンモ ヒロハノエビモ	羅臼事業場がある。
11	7.0	さけ、ます、チカ	ナガバノエビモ ヒロハノエビモ	流入する奥ノ川に捕獲場がある。
12	7.2	さけ、ます、イトウ	キンギヨモ イトモ	
13	7.4	さけ、ます、チカ、べにさけ	キンギヨモ ナガハノエビモ	当路事業場では湖内で親魚を捕獲している。

国後に派遣してその真相を調査させ、又その翌年は最上徳内に命じて択捉、得撫島の状態をつぶさに調査させたその結果初めて露人南侵状態が明白となり、北辺防備の急務を説く者が出るようになった。更に幕府は1791年(寛政3年)再度最上徳内に命じて検分させたが露人は南千島の竄盗を企図し、更に本土の近海を脅やかすようになったので幕府は遂にその治安並びに経営責任を弱小の松前藩に任せるとのむずかしいことを認め、1798年(寛政10年)に渡辺久蔵外80名を派遣して大規模な調査を命ずると共に一行中の近藤重蔵は国後に渡り、択捉に進んで実地に検分し、翌年高田屋嘉兵衛に命じて択捉航行の途を開かせ、更に1800年(寛政12年)近藤重蔵は前の調査に基いて漁場17箇所を開き、全島を7郷25村に分けて郷村の制度を定め、「大日本恵登呂府」と書いた標柱を薬取村の「カムイワッカナイ」の高地に建てて帰った。このように、幕府は数回に亘って幕吏を択捉に派遣して視察させたが、事の重大さに鑑み1802年(享和2年)東蝦夷地の仮支配を改めて幕府の直轄とし、勤番所を設けて警備に当ることにした。

その後1807年(文化4年)露船2隻が択捉に来襲し、警備に当たった南部、津軽両藩の兵は逃亡するか或いは撃たれ幕吏戸田亦大夫は憤死した。(この地は紗那より約4 Km有筋にあり、腹切沢と称し、石碑があった。)以来、国威は北辺に及ばないで露人の蹂躪する処となり、辛うじて択捉を仙台藩に、国後を秋田藩に命じて警備を固めさせ、又1816年(文化3年)高田屋嘉兵衛に択捉場所、藤野喜兵衛に国後場所をそれぞれ請負わせ、和人の移住と漁場の開発を図った。

然し、とかく北辺のこの地方は幕府の所在地から遠いため経営に多大の困難があり、その手薄に乗じて露国は南千島は勿論のこと、本道にまでその勢力を及ぼそうとして現地の紛争が絶えなかった。そこで1854年(安政元年)ロシア使節ブチャーチンと幕府が交渉し

て「日本国とロシア国との境は、択捉島と得撫島の間とし、択捉島と国後島は日本国に、得撫島より北方のクリル諸島はロシア国に属す。樺太は日本国とロシア国との間に境を分けず従来通りとする。」という、所謂「日露和親条約」を下田で結んだ。

1868年(明治元年)、大政奉還に伴って蝦夷地全島は政府直轄となり、北海道と称して11国86郡が定められ、翌年開拓使が置かれた。

千島国は紗那郡を仙台藩に、国後郡を秋田藩に、択捉郡を彦根藩に、振別郡を佐賀藩にそれぞれ支配を命じたが、1872年(明治5年)これを解いて開拓使根室支庁に統轄した。

日露和親条約締結後も樺太と共に、千島は現地において屢々紛争が起った。しかし、1874年(明治7年)年に榎本武揚が全権大使としてロシアに派遣され、数次に亘る交渉の結果、翌年1875年樺太、クリル諸島の「樺太、千島交換条約」(明治8年5月17日全権大使日本・榎本武揚、ロシア・ゴルチャコフがセント・ピーターズフレットにて署名)が締結されてからは、得撫島以北の千島列島も我が国の領有となり、1876年(明治9年)には北千島・中千島と併せ得撫・新知・占守の三郡が定められ、開拓使根室支庁の管轄に置かれた。

その後、1882年(明治15年)開拓使の廃止に伴い三県が置かれ、千島は根室県に所属することになったが、1886年(明治19年)、北海道庁の設置に伴ない県が廃止されてからは紗那支庁の隸属となり、さらに1903年(明治36年)には紗那支庁と根室支庁の合併により、根室支庁の統轄下に入り、爾来1945(昭和20年)まで約半世紀の長い間我が国の産業上に大きな役割りを果してきた。しかし、終戦と共にソ連軍の進駐によって千島列島は勿論、歯舞、色丹島までも行政の及ばない地域となった。

郡別の開基沿革は次の通りである。

(紗那郡紗那村)

1800年：幕吏近藤重蔵と請負人高田屋嘉兵衛漁場開始。



い季節風により、オホーツク海側では1,000mm内外の降水量であるが、太平洋側ではそれより幾分少ない。然し、夏期になると逆に太平洋側の方が多くなる傾向があり、大体800mm～1,000mmである。

また降雨日数についてみるとオホーツク海側では、冬期間連日のように降雪があるのに反し、太平洋側ではその半分以下である。夏期間は西側とも殆んど差がなく、年間の降雨総日数は太平洋側で220～230日、オホーツク海側では150～160日である。

### ③ 風

この地方は日本に襲来する低気圧が通過する経路にあたっており、冬期間はオホーツク海側を、夏期には太平洋側を通過する傾向がある。特に、冬期は雪を交える猛烈な偏西風が吹き続き、月間20日内外の暴風となるが、夏期になると極めて平穏の日が続き、本道と

殆んど変わらない位である。然し、この地方は低気圧の通過直前に急激に天候が悪化し、通過後も容易に平常に復さない傾向にあるので夏期間でも5～7日間の暴風となる。

### ④ 季 節

初霜(雪)は本道中央部と殆んど変わりなく10月上旬か下旬であるが、終日は根室に比べて共に10日以上遅いようである。

この地方にとって看過し出来ないのはオホーツク海沿岸の流水で、接岸の初日は平年2月20日頃、離岸は4月下旬である。(南の国後島の初日は2月上旬で北ほど遅い)。流水は4月上旬頃から風位によって離、接岸を繰り返す、各島々の水道より太平洋に出るが、ここの離接岸によって海浜の岩石に附着する海草類の孢子を離脱させるので、この時期になると海草を採取する島民は、一喜一憂して流水を見守ったものである。

## 気 象 の 概 況

(紗那測候所観測、  
1924～1943の平均)

気象事項	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温	<sup>0.C</sup>	-5.5	-6.8	-4.3	1.4	5.3	9.1	13.6	16.0	13.4	8.9	3.2	-2.2	4.3
平均最高気温	<sup>0.C</sup>	-2.7	-3.7	-0.7	5.1	9.6	13.4	17.7	20.1	17.4	12.7	6.2	0.4	8.0
平均最低気温	<sup>0.C</sup>	-8.6	-10.5	-8.4	-2.1	1.2	4.9	9.7	12.2	9.1	4.6	-0.2	-5.1	0.6
気温高極	<sup>0.C</sup>	8.6	8.8	12.0	21.3	26.5	27.3	30.7	31.1	26.7	22.5	17.6	12.2	31.1
気温低極	<sup>0.C</sup>	-23.2	-26.1	-24.5	-13.5	-6.1	-3.7	-1.5	1.1	-1.2	-4.1	-8.6	-15.8	26.1
降雨量	<sup>M.M.</sup>	91.5	53.2	58.4	68.8	78.5	59.6	79.4	107.8	102.6	114.6	134.6	108.0	1057.1
平均風速	<sup>M/S</sup>	8.7	7.4	6.5	5.8	5.2	4.1	3.8	3.9	4.7	6.5	8.5	9.2	6.2
最大風速	<sup>M/S</sup>	40.8	38.4	32.3	31.1	31.2	32.7	24.0	22.3	32.0	29.9	34.9	36.8	40.8
最多風向		N.W	N.W	W	W	S.E	E	E	S.E	S.W	W	N.W	N.W	N.W
雪日数		29.5	25.8	23.6	12.7	5.5	0.1	—	—	—	1.4	17.0	28.8	143.9
暴風日数		22.9	16.4	15.5	14.9	11.2	5.6	4.5	7.1	8.6	16.2	20.6	23.9	167.4

初霜 10月5日 終霜 6月11日

初雪 10月31日 終雪 5月18日

初流水 2月19日 終流水 4月23日

### ⑤ 植生状況

本島の樹木は気候および土質の関係から南

部、中部、北部の3地区に分れている。

南部は樅松、蝦夷松などの針葉樹が主で林相も豊かである。また白樺、イタヤ、ハンノキ、桜、ナナカマドなどの活葉樹が散生し、その成育は良好である。草本は低湿地帯にフ

キ、イタドリ、アザミ、ナナツバなどが生育し、海浜地にはハマナス、ハマエンドウ、フウロー、ヨモギなどの雑草が多く、高丘地および樹林地には熊笹が密生している。

中部では楡松、蝦夷松など少々薄く白樺、ハンノキ、イタヤなどの活葉樹に変り僅かの落葉松が混生する矮性林となっている。草木は南部と大差なく、箇所により熊笹が密生している。海浜地にはハマナス、ハマエンドウ、放牧地にはチモシー、レットクローバーなどの牧草、エゾスカシユリ、蓆、ナナツバなどの雑草が多い。

北部は落葉松、白樺、ハンノキ、イタヤなどの針、活混雑林相をなし、一般に立木が少なく草原の処もある。北部の高地にはハイ松、その他高山植物が活葉樹と混生している。

昭和15年現北海道大学名誉教授館協操博士が千島列島の植物研究に渡島された折紗那事業場附近一帯に自生しているエトロフ柳（択捉とカムチャッカ以外にない珍しいもので雄葉が4本ある。）とエゾリンゴ（俗にサーナンと言っている）を調査された。

ウルップ島と択捉島間の択捉水道は、道東

植物系とカムチャッカ以北の植物系を区分する「宮部ライン」で知られている。

また、択捉島全域に自生するシコタン松（主に中部に自生し樹脂が非常に多く、木質の密度が高い落葉松の一種）はシベリヤの一部と2地区にだけある世界的に珍しい樹種とさく。

## 2. 部 落

太平洋に面する東海岸は地勢の関係から部落も少なく、主に海草を採取する50戸程の部落が散在し人口も稀薄である。

一方オホーツク海に面する西海岸は海岸線の屈曲が多く、従って錨泊に安定する漁村あるいは市街地があって、行政および物資集散の中心となっている。殊に紗那は島のほぼ中央に位置し、村役場、二等郵便局、無線電信局、営林区署、警察署、測候所、根室区裁判所出張所などの諸官衙と、北海道庁千島調査所が所在し枢要な地であった。

択捉島には発電の設備がなかったため、各家庭ではランプを用い、ラジオは乾電池を使用した。

3カ村の定住者戸数および人口は次の通りで、約50%は漁業に従事している。

村名	昭 9		昭 10		昭 11		昭 12		昭 13		昭 14	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
紗那	264	1,906	292	2,073	269	1,664	270	1,821	278	1,734	293	1,763
留別	415	2,200	443	2,554	430	2,432	438	2,599	438	2,762	425	2,690
葉取	117	1,302	128	1,482	121	813	136	902	116	872	113	704
計	796	5,408	863	6,109	820	4,909	844	5,322	832	5,368	831	5,157

本島さけ、ます漁業の約95%を経営している択捉漁業株式会社は函館市に本店をもち、また個人経営の漁業者も函館に居住しており、漁時期に渡島する。4月下旬流水の去るのを待って、たら、かにの漁業や捕鯨業が始まり、6月からはます、続いてさけ漁に入る。これらの缶詰工場および捕鯨場の操業によって、漁夫および従業員などが季節的に渡島し、その数は定住者の約150%に達する。その他7～8月中は気候もよく、根室、函館からの定期船便の回数も多く、大変便利にな

り、本道から官庁関係の視察、調査および行商も渡島し、又漁期間だけではあるが、綺麗どころも乗込んで急に賑やかになる。

元北大水産学部教授延田豊治氏は鯿の調査研究に2～3度来島され、漁場を案内したが、驚くほどの酒豪であり、また北海道水産試験場技師長峯千山氏は海草類を調査され、沢山標本を作っておられたように記憶している。

ます漁期のピーク時には青森市から鮮鯿積取りの冷蔵船が出入し、市街地や錨地は非常

に活気づく。殊に、紗那は通信に便利な関係もあって、夜間は湾内に50～60隻が碇泊し、航海灯が静かな波に映って、イルミネーションのようである。このような時期は短かいが島としては最もよいときで、市街も大変賑う。逆に冬期中は各部落とも漁場の切揚げによって定住者だけとなり、造材作業や暖房用薪の伐採に従事するだけの単調で苛酷な冬の生活である。

### 3. 交通と通信

#### ① 交通

本島は交通に甚だ恵まれなく、陸上に至っては僅かに南端の内保と北端の薬取間に準地方費道路が設定されていたが、開拓が少しも進まず自転車さえ使用出来ない状態であった。内保～入里節間約15km、年萌～別飛間の約70kmは車馬が通れる道路であるが、他の道路は辛うじて馬が通れる程度にすぎない。また、径路には処々に断崖や急坂あるいは海浜を磯伝いする箇所などあって、単身での通行は非常に困難な状態にあるため、沿岸の小部落への往来はどうしても船の便にたよる以外に方法はない。

海路による本道との交通は4月下旬より12月上旬までで、函館および根室港を基地とす

る北海道庁命令航路の定期便があり、太平洋岸の東廻り線は入里節、天寧、年萌および茂世路まで、オホーツク岸廻り線は内保、留別紗那、別飛および薬取の各主要港に往復寄港する。

#### ○函館港を基地とする定期船

近海郵船株式会社が北海道庁命令定期航路として、5月から11月まで月3回3,600トン級の貨客船（大隅丸、弘前丸）が函館を出港して、釧路、根室に寄港の西廻り線として就航した。函館出港後各港にて貨物の積み下しがあるので、留別、紗那は4日目に到着し、別飛は5日目、薬取は6日目となる。留別、紗那は往復とも寄港するが、9月下旬から11月は北西風のため20日間も入港できないこともある。この航路は昭和15年廃止となり、択捉の航路は専ら根室港からの定期船を利用することになった。

#### ○根室港を基地とする定期船

北海道庁命令航路として約100トンの発動機木造船が東、西廻りで就航していたが、この航路は船便の回数も多く、根室出港の翌日には留別、紗那に到着するので大変便利であり終戦まで就航した。

### 定期船の就航状態

線名	区間	寄港地	期間と回数
根室線 択捉	西海岸廻り 根室～紗那間	内保、留別、紗那	4.12月各1回：5.6.9.10月各3回：7.8月各4回 11月2回：1.2.3月は航海なし。
	東海岸廻り 根室～年萌間	入里節、貝谷、植内、年萌	4.12月各1回：5月2回：6.7.9.10.11月各3回： 8月4回：1.2.3月は航海なし。
函館線 択捉	西海岸廻り 函館～薬取間	内保、留別、紗那、別飛、 紗万部、薬取	1.2.3.4月は航海なし。 5.6.7.8.9.10.11月は各3回：12月1回
	東海岸廻り 函館～年萌間	入里節、貝谷、天寧、年萌	4月1回：5.6.7.8.9.10月各3回： 12月2回：12.1.2.3月は航海なし。

東海岸は4月から7月頃まで、濃霧のため航行が容易でなく、西海岸も9月下旬頃から西北風によって時化の日が多くなり、不定期便となること屢々であった。特に12月上旬から翌年の4月下旬までは連日暴風にみまわれ、更に12月以降は流氷が接岸するため全く航海は杜絶する。

航海の訓練のとき東海岸の不凍港、年萌港まで郵便物を運んだが、年萌局から島内各地に人背によってスキーで次々と運搬される。航行が絶えると2カ月以上も本州、本道から郵便や小包等がなく、島民にとって、駆逐艦の来航は何よりの慰みであった。また、この時に受けとった新聞や公文書は、日付を逆に開封して後で整理することが普通である。その

なお、大湊要港部の駆逐艦が毎年2月耐寒

後は4月下旬まで航行がなく、俸給、諸手当などの郵便局払出し金券も纏って送付になるため、誠に不便かつ不自由な生活であった。

## ② 通 信

郵便局は主要部落にあり、紗那が2等局の外は請負の局であった。本道との郵便物は前述の函館および根室からの定期船で往復する。

電信は海底電線が敷設されていたため、国後島を経て根室局に接続し、船便のない冬期中における唯一の通信機関であったが、流氷によって不通になったこともあり、これを整備するとともに昭和5年紗那無線電信局が設置された。

## Ⅲ 漁 業

本島の環海は千島寒流と対島暖流が交錯しているため水族が極めて多く、古くから世界三大漁場の一つに数えられている処である。特に南千島は地形上北海道本土とは密接な関係があって、古く松前藩時代から漁業が開拓された。

高田屋嘉兵衛が1800年(寛政12年)漁場を開き、その後栖原角兵衛(栖原氏は千島、樺太および北海道の漁業創設者で、明治8年ロシアと千島、樺太交換条約成立まで樺太に50箇所の漁場をもち、その後択捉島オホーツク海岸沿いの大部分の漁場を終戦時まで経営した。)の経営した処で、漁獲物はさけ、ます、たら、にしん、かになどのほか海藻としては昆布、フノリ、クロノリ、ギンナン草などが挙げられる。さけ、ますなどの主要漁業は専ら会社企業で、函館より時期的に乗り込み、製品は函館に集荷される。たら、昆布その他の雑魚は零細土着民の事業として海産商人に依る仕込経営または協同漁業組合を中心とする個人経営が大多数を占めており、製品は殆んど根室に集荷される。

本島におけるさけ、ますの生産額は、昭和13年において約1,200万円に達し、全島生産額の約85%に当る。

さけ、ます漁業の消長は本島の漁業経営に

重大な影響があり、大正11年河川漁業を廃止して沿岸漁業に切り替え、天然繁殖の助長と共に人工ふ化により、ます5万石(約600万尾)さけ2万石(約120万尾)の漁獲を維持するため、ふ化場設置15カ年計画を樹立し、毎年ます2億5千万尾、さけ1億尾をふ化放流する計画を同年9月の択捉島水産会で可決し、昭和13年よります5万石、さけ1万5千石(約90万尾)の漁獲も安定し、河川の浜上も漸次多くなった。さけ、ますは殆んどオホーツク海沿岸に洄遊し、べにさけは同岸の北部にあるシベトロと当路に接岸するが、太平洋岸のウルモベツに多く接岸し、ウルモベツ湖には東洋一を誇る設備のふ化場があった。

千島の漁業資源については総ゆる角度から調査が進められ、昭和13年には前田利為候爵を団長、真藤日魯社長を副団長とし、戸塚北海道庁長官、下村宏法学博士外7名による千島調査団が、北千島より漸次各島の調査を進めた。紗那に上陸されたのは8月上旬で、磯には、ハマナス、エゾスカシユリ、クロユリなどが馥郁と咲き満ちて、島としては最もよい季節であった。紗那ふ化場を視察したあと、紗那川の石原で盛んに浜上するますの美味しい石鍋料理(平たい石を木炭か焚火で熱し、味噌で丸く囲んで鍋として、ますと野菜を砂糖と酒で味付けする)を味わい、廻りの環境と素朴な野趣に満ちた珍しい択捉独特の料理に大変満足された。その時筆者は下村先生より即興の短ざくを2枚頂き、折角の記念も今もっていないのは誠に残念である。

昭和11年9月北海道で行なわれた陸軍特別大演習の際、北方地域の状況ならびに北洋漁業視察のため久松付従がご差遣になり、択捉島の漁業状況を択捉島水産会長八木沢繁次氏よりご説明申上げた。

昭和14年には北海道庁千島調査所が紗那に設置されて、千島列島の水産、林業および地下資源を3カ年に亘り74名のスタッフで北海道拓殖費約45万円をかけて調査した。所長には平田秀雄氏(現北海道放送株式会社常任監

査役)、水産資源関係に三原健夫氏(現北海道さけ、ます増殖事業協会長)、尾崎須三郎氏、庶務課長藤原氏、畜産関係に江田直衛氏が当たられた。これらの諸資料は北方領土復帰ならびに北方漁業の諸対策に大きく役立っているものと信じている。

### 1. さくらます

さくらますは4月上旬から5月下旬に接岸するが、その数は僅少で直ちに河川に浜上するため、沿岸では殆んど漁獲の対照にしていなかった。

### 2. からふとます

からふとますはさくらますについて、6月上旬よりオホーツク海に接岸し、7月上旬より盛期に入る。初期に接岸するのは本島のほぼ中央の留別地区で、それより紗那、別飛、藁取と漸次北に移り、一群は南下して老門方面に接岸する。漁期は約2カ月であるが、択捉島最大の漁業資源となっており、昭和9年は着業数525カ統で約176万尾、同11年は455カ統で、約310万尾、同15年は475カ統で約584万尾を水揚げしている。また漁獲物の大半は缶詰工場で加工され、その他は塩蔵または鮮魚のまま冷蔵船で青森に輸送される。なお、昭和4年のように択捉漁業開始以来の大豊漁となって、約720万尾を水揚げし、盛漁期の8月中はどの漁場も建網のアバが沈む程乗網して起しきれず、例年のようにどの地区が主に接岸するということではなく、海底から湧く

ように感じられたという。勿論工場はフル操業で処理に当り、一方青森からの積取り冷蔵船は、次々と満船し、また、函館から塩の輸送が間に合わず、処理に窮した。その後は漁獲も安定し、年々約600万尾(5万石)を水揚げするようになった。

### 3. さけ

さけは8月下旬に島の東北方面より南下、接岸し、9月中旬から10月中旬が盛期である。二百十日以後は北西風の時化のため操業ができず、漁期半ばにして10月下旬から切揚げ初める。昭和15年の着業数は158カ統で約90万尾(約1万5千石)を漁獲している。殆んど塩蔵にして「エトロフ新巻」として函館に集荷される。

### 4. べにさけ

択捉島は我が国唯一のべにさけの生産地であって、からふとますと同時期にオホーツク海沿岸北部の藁取および当路地区に若干接岸して何れも湖に入る。太平洋岸では年蒞湖に入るはカウルモベツ地区に多く接岸し、当時は本部最良のべにさけ漁場で、殆んど缶詰にして欧州向けに輸出された。しかし、大正15年(1926年)の72,000尾を最高に昭和8年(1933年)には10,800尾となり漁獲は減少している。

## V さけ、ますのふ化事業

### 1. ふ化事業の沿革

択捉島の水産資源保護として特筆するものにさけ、ます人工ふ化事業があり、千島における主要魚のさけ、ます再生産のため古くからこの事業が積極的に実施された。

明治12年(1879年)には択捉島の振別よりべにさけ卵約6万粒を札幌偕楽園に移殖し、ふ化放流した記録がありその歴史は古い。本島のふ化事業は栖原角兵衛氏がその必要性を首唱し、同23年(1890年)当路湖畔に簡易ふ化場を設置し、ふ化伝習生を募集して技術者(月手当4円を支給)を養成した。一方、北海道庁より特別に派遣された藤村信吉技手により、



択捉漁業K.K.紗那鱒缶詰工場(昭和12年)  
(中央は紗那川)

各地区のふ化場建設予定地の調査が実施された。その結果同28年(1895)年択捉島水産組合によって第一期計画として、同技手の設計により別飛および紗那に各々700円の経費でふ化場が建設された。しかし、同年はたまたま不漁のためふ化器その他の購入は到底負担に堪えず、翌年は組合の役員更迭の結果・事業計画が変更になり両処の建物は売却された。

明治43年(1910年)、択捉島水産組合は留別

川にふ化場を建設し、つづいて大正9年には紗那に新設した。一方大正4年には谷茂平氏がウルモベツにべにさけふ化場を設置するなど、択捉のふ化事業は漸く拡充の機運に向った。大正10年当時の択捉島水産組合長八木沢繁次氏はさけ、ますのふ化事業が本島の将来に益々重要であることを力説し、総会において留別ふ化場を北海道庁に寄附して設備の拡充を図ると共に、次のふ化場建設計画を決議した。

年次	河川名	収容		設け	備計		備考
		ま	す		さ	合	
			万粒		万粒	万粒	
大正11年	老門川		1,000		1,000	2,000	
12年	年崩川		1,000		1,000	2,000	
13年	薬取川		5,000		2,000	7,000	
15年	当路湖		500		500	1,000	増設
17年	別様川		5,000		2,000	7,000	
19年	内保川		2,500		500	3,000	
21年	紗那川		5,000		2,000	7,000	増設
23年	留別川		5,000		5,000	10,000	増設

その後、ふ化場の建設は年々進められ、次のふ化場が設置されて10カ処となり、択捉全体でさけ、ます併せて2億3,500万粒の収容設備となった。

大正13年 有崩ふ化場(有崩川)  
留別ふ化場は北海道庁に移管

昭和2年 別飛ふ化場(別様川)  
4年 比良糸ふ化場(比良糸川)  
7年 羅臼ふ化場(羅臼川)  
8年 年崩ふ化場(年崩湖)

留別ふ化場の北海道移管によって、北海道庁は千歳鮭鱒ふ化場は日本海に、虹別ふ化場は根室海に、留別ふ化場はオホーツク海の各海区にふ化放流と併せて民営ふ化事業を指導する体制となった。

北海道においてこのようにさけ、ますふ化事業が拡充整備されたことは、早くから北海道庁が経営を監督し、取締の制度として、「北海道人工ふ化事業取締規則」を公布実施したことによるものと信ずる。奨励制度の代表的なものとしては、農林省令「漁業共同施設奨励規則」および「水産増殖奨励規則」があり、また、北海道庁令「水産奨励規程」により北海道拓殖費をもってふ化事業に対し

て、奨励金を交付し更に間接には斯業を奨励する方法として北海道庁では「さけ、ますふ化実習生規程」があって、ふ化技術員を養成する制度があった。

#### 北海道人工ふ化事業取締規則

(昭和2年5月7日北海道庁令第77号)  
(昭和3年5月26日北海道庁第37号改正)

第1条 本則において人工ふ化事業と称するは公益の目的を以て鮭鱒族魚類の採卵ふ化放流を為すものを謂う。

第2条 人工ふ化事業は左の各号の一に該当するものに限り之を許可す。

1. 水産會法に依り設立したる水産會
2. 水産組合又は水産組合連合會
3. 漁業組合又は漁業組合連合會
4. 前各号の外北海道庁長官において適當と認めるもの

第3条 人工ふ化事業を行わんとするものは左記事項を具し北海道庁長官の許可を受くべし。

1. ふ化場の名称
2. ふ化場の所在地
3. 事業經營者の住所及び氏名(法人にありては事務所々所在地及び代表者

氏名)

4. 放流すべき魚種
5. 事業計画
  - イ 事業施行場所の関係水域を示す  
図面(漁場の位置を併記すべし)
  - ロ 所要親魚数, 採卵数, 放流数
  - ハ 回帰魚増加見込数
  - ニ 受益者数
  - ホ 将来拡張計画の概要
  - ヘ 着手後5年箇年間の収支計算書
  - ト 事業維持の方法
  - チ 規約, 会則, 定款又は寄附行為  
を記載したる書類
6. 設計書
  - イ 採卵場の面積, 構造配置図, 平面図及び断面図
  - ロ ふ化室, 事務室, 倉庫, 住宅の  
面積, 構造, 配置図, 平面図及び  
断面図
  - ハ 水源及び誘水設備の大きさ, 数量  
構造, 配置図, 平面図及び断面図
  - ニ 養魚池の面積, 水深, 給水量,  
構造, 配置図, 平面図及び断面図
  - ホ 採卵及びふ化器具の種類, 大きさ  
数量, ふ化室給水量及び配置図
  - ヘ 採卵ふ化に要する器具の名称,  
数量
  - ト 技術員の数
  - チ 工事完成期日
  - リ 設置費予算

己に許可をうけたるものにして前各号の事項を変更せんとするときも亦前項に同じ。

第4条 前項の許可を受けたるものにして親魚捕獲を為さんとするときは左記事項を具し北海道庁長官の許可を受くべし

1. 捕獲すべき親魚の種類
2. 捕獲の場所(正確なる図面をもって地区を明示するを要す)
3. 捕獲の時期
4. 捕獲の方法(漁具の種類, 大きさ,

数量を記載し必要な事項は図示するを要す)

5. 未熟魚の蕃養方法
6. 卵子の運搬方法

前項に依り許可をうけ採捕したる親魚は特別の事由なくして之を採卵以外の用途に供することを得ず。

第5条 人工ふ化事業を行うものは採卵場, ふ化室, 養魚池, その他必要なる設備を有する人工ふ化場を備えその設備は左の標準によるべし。

1. 採卵場には親魚収容の為活洲を備え採卵室及びふ化室は直射光線及び寒気を防止し得る構造と為すべし
2. 養魚池の中仔魚池は溝渠式に依り水深1尺内外とし池底を礫床たらしめ日射防止及び害敵予防装置を備え浮遊池は水深2尺以上とし, その面積は仔魚池の20分の1たらしむべし
3. ふ化器は「アトキンス式」ふ化器を使用するものは卵数10万粒に対し毎分時1斗以上, 仔魚用水は100万尾に付毎分時1石以上を給水し得る設備をなすべし, 但しふ化用水は4階段に配置したるふ化槽においては40万粒に対し給水することを妨げず鮎, 鱈類人工ふ化場は前項各号の標準に依らざることを得

第6条 人工ふ化場に左の各号の一に該当する資格を有する技術員を常置し, その採用解任を為さんとするときは北海道庁長官の許可を受くべし。

1. 道府県立水産学校若しくは水産講習所の養殖科卒業生又は之れと同等以上の技術を有する者
  2. 北海道庁鮭鱒ふ化場においてふ化技術を修得したる者
  3. 2ケ年以上鮭鱒ふ化場に勤務し技術に従事したる者
- 技術員の採用認可申請書には給料額を記載し履歴書を添付すべし

鮎類人工ふ化場につきては前二項の規程に依らざることを得

第7条 人工ふ化事業を休業し又は廃止せんとするときは事由を具し北海道庁長官に届出つべし。

第8条 第3条若しくは第4条の許可をうけたる者は其の事業の全部又は一部を請負、委託又は貸付の方法により他人をして之を為さしむることを得ず但し特別の事由に依り北海道庁長官の許可を受けたるときは此の限りに在らず。

第9条 北海道庁長官は必要ありと認めたるときは親魚捕獲場、採卵場、ふ化場の位置、構造、設備その他経営方法に関し必要なる命令を発することあるべし。

第10条 人工ふ化事業の許可をうけたる者は北海道庁長官に左の報告を為すべし。

1. 事業に着手し又は終了したるときは様式第一号に依り3日以内
2. 親魚捕獲採卵期間中は様式第二号及び第三号に依り捕獲場別に即日及び毎月末日限り、之を終了したるときは様式第四号に依り7日以内
3. 人工ふ化事業を終了したる時は様式第五号及び第六号に依り毎年7月末日限り
4. 事業予算は様式第七号に依り事業に着手せんとする年の3月末日限り決算は同様式に依り、事業終了したる年の7月末日限り

第11条 北海道庁長官は必要ありと認むるときは所属吏員をして事業を検査し又は指揮、監督せしむることあるべし。

第12条 種卵、種苗の移入、分譲を為さんとするものは左の事項を具し北海道庁長官の許可を受くべし

1. 移入若しくは分譲すべき種卵、種

苗の産地、種類、数量又は分譲先

2. 移入若しくは分譲先の放流場所

3. 移入若しくは分譲の時期及び方法

第13条 左の各号の一に該当するときは北海道庁長官は事業の許可を取消し又は停止を命ずることあるべし。

1. 本則若しくは本則に基きて発する命令又は許可の事項に違背したるとき
2. 公害を害する虞ありと認められたるとき
3. 事業の効果なしと認めたるとき
4. 第3条に依り許可をうけたる日より一箇年以内に事業を開始せざるとき
5. 引続き休業2箇年以上に亘るとき

第14条 第4条第2項の規定に違反したるときは50円以下の罰金拘留又は科料に処す

第15条 本則により北海道庁長官に提出する書類は人工ふ化場所在地を管轄する支庁又は市役所を経由すべし

#### 附 則

第16条 本則は公布の日より施行す。

第17条 本則施行の際已に許可を受け現に人工ふ化事業を行うものは本則により許可を受けたるものと看做す、但し北海道庁長官の認可を受けたるものは本則施行の日より二箇年間第五条の規定に依らざることを得

様式第一号 事業着手終了届

様式第二号 親魚捕獲採卵日報

様式第三号 親魚捕獲採卵月報

様式第四号 親魚捕獲採卵成績表

様式第五号 ふ化成績表

様式第六号 ふ化事業報告

様式第七号 ふ化場経費予算書

昭和5年頃より北千島さけ、ます流網が急激に増加したことによって、北海道沿岸並びに南千島に対する影響が大きくなったので、同8年民営ふ化事業代表の八木沢繁次氏（扱

捉), 小池二郎氏(根室), 吉田為造氏.(釧路), 斎藤主計氏(伊達), 野坂良吉氏(網走), 大西真平氏(紋別)の諸氏が北海道庁に「北千島鮭鱒流網漁業の影響と民営ふ化事業に関して」を陳情した。その結果, 同年の北千島流網網漁業は800件の出願に対し, 大串に縮少されて, うち195件が許可になった。更に道水産課はふ化事業を国営とすることを立案し, 翌9年4月には択捉および国後を含

む全道民営のふ化場38箇場が国営移管され, 初代場長には北海道庁水産課増殖主任の半田芳男氏(前北海道さけ, ます増殖事業協会長)が発令された。なお, 北海道庁千歳鮭鱒ふ化場が本場となり, また同虹別および留別ふ化場は支場となって各地域を統轄することになった。択捉においてはウルモベツのべにさけふ化場を除いた, 比良糸ふ化場外8ヶ場が択捉支場の事業場となった。

### 択 捉 支, 事 業 場 職 員 (昭和9年7月)

支場又は事業場名	支場長又は事業場主任	職 員 名
択 捉	石井久治	野口良雄, 郡山茂利雄, 木戸口伊兵衛, 下山卯之松, 関谷定雄, 大沢茂夫, 長谷川友之助, 竹島儀蔵, 岡本辰蔵
紗 那	水戸部勝次	八木沢喜家, 島田定治, 伊藤市郎, 吉田俊男
別 飛 当 路 比 良 老 糸 羅 門 年 白 有 崩 崩	吉野国之介 吉田武一 臼井義雄 辻民治 小杉孝四郎 新妻六郎 (兼)八木沢喜家	栖山光治 高橋専太郎

国後島も択捉島と同様さけ, ます資源維持のため, 古くからふ化場が設置され, 昭和8年における両島の官営民営, による事業場は15カ場を数え, その事業量は北海道鮭鱒ふ化場の総事業量に対し, 親魚捕獲数において, さけは約38.3%, ますは約76.4%のウエート

を占めていた事実によっても如何に両島がさけ, ますの再生産にとって重要な地域であったかを知ることが出来る。昭和20年の終戦によってソ連の支配下となり, 全道のふ化事業量も約35%の減となった。

### 択 捉, 国 後 島 の ふ 化 設 備 (昭和18年)

区 分	経 営 区	ふ化場数	収 容 設 備				備 考
			さ け	ま ず	べ に さ け	合 計	
国 後	官 営	5	3,000 万粒	3,100 万粒	—	6,100 万粒	支 場 1 事 業 場 4
択 捉	官 営	9	7,100	5,250	—	12,350	支 場 1 事 業 場 8
"	民 営	1	—	—	8,000	8,000	谷 茂 平 経 営
合 計		15	10,100	8,350	8,000	26,450	

## 2. 設 備 状 況

ふ化場は湧水または地下浸透水の湧出する地に設備され, アトキンスふ化槽を平水または階段式に使用していた。

ふ化は民営時代より基礎コンクリート木造平家建であるが, 紗那事業場ふ化室(545平方米)を改築する際, 床下に養魚池を設置し, 1~2月の吹雪時にふ出盛期の稚魚をそこに

放養するようにしたので、作業と管理が大変容易であるばかりでなく、増収容するとき卵子を仮収容することも出来た。なお、その際に事務室と宿舎を階上に設け、建物を立体的に活用することを設計者に希望したが、現在のような建材のなかった当時としては木造建築のふ化室の上に宿舎を設けることについては、どうしても採択されなかった。

養魚池は一部を除いて木造であるが、当路、比良糸事業場は玉石を積んでモルタルを詰め、堅牢で永久的なものであった。当路の養魚池はべにさけの蓄養池を兼ねるよう水深を約1mに調節出来る設備にされていた。また比良糸事業場には構内に創立記念碑があり、監督者白井義雄と刻まれてあった。

### 官 営 に よ る 事 業 成 績 (昭和16~18年)

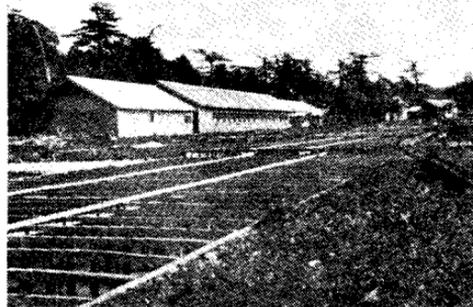
年 別	後			捉			合 計
	魚 種	成 績		魚 種	成 績		
昭和16年	さ け	捕獲	56,856尾	さ け	捕獲	292,950尾	349,806尾
		放流	30,975千尾		放流	139,023千尾	169,998千尾
	ま す	捕獲	3,449尾	ま す	捕獲	105,466尾	108,915尾
		放流	1,574千尾		放流	32,473千尾	34,047千尾
昭和17年	さ け	捕獲	45,998尾	さ け	捕獲	234,467尾	280,465尾
		放流	28,393千尾		放流	122,468千尾	150,861千尾
	ま す	捕獲	775尾	ま す	捕獲	105,648尾	106,423尾
		放流	460千尾		放流	30,200千尾	30,660千尾
昭和18年	さ け	捕獲	35,931尾	さ け	捕獲	211,276尾	247,207尾
		放流	23,452千尾		放流	105,914千尾	129,366千尾
	ま す	捕獲	1,844尾	ま す	捕獲	231,990尾	233,834尾
		放流	1,040千尾		放流	55,399千尾	56,439千尾
昭和19年	さ け	捕獲	59,210尾	さ け	捕獲	139,454尾	198,664尾
		放流	19,925千尾		放流	57,828千尾	77,753千尾
	ま す	捕獲	—	ま す	捕獲	4,507尾	4,507尾
		放流	—		放流	1,584千尾	1,584千尾

### 捉 捉 支 場 管 内 の ふ 化 施 設 (昭和9年7月)

場 名	創立年	収 容 設 備		ふ化室		養魚池		ふ 化 用 水		移 管 前 経 営 者
		さけ	ます	面 積	面 積	種 類	水 温			
捉 捉 (留別) 比良糸	明治43	万粒 1,000	万粒 1,000	m <sup>2</sup> 825	m <sup>2</sup> 1,320	湧水 河水	混合	6.5	大正13年移管 (捉捉島水産組合)	
	昭和 4	500	750	272	1,188	湧 水		5.0	栖原合名会社	
当 路	明治23	300	300	231	1,320	湧水 河水	混合	3.0	栖原合名会社	
別 飛	昭和 2	1,500	1,000	396	1,386	湧 水		5.5	捉捉島水産会	
有 萌	大正13	500	500	238	990	河 川 水		3.0	八木沢繁次	
紗 那	大正 9	1,500	1,000	545	2,376	浸 透 水		3.5	捉捉島水産会	
年 萌	昭和 8	300	200	73	660	湧水 河水	混合	6.5	半冠養殖組合	
羅 白	昭和 7	500	—	99	396	湧水 河水	混合	5.0	羅白沼鮭鱒養殖組合	
老 門	大正11	1,000	500	231	1,155	湧 水		7.0	栖原合名会社	
合 計		7,100	2,250	2,910	10,791					



移管当時の択捉支場 (昭和9年留別)

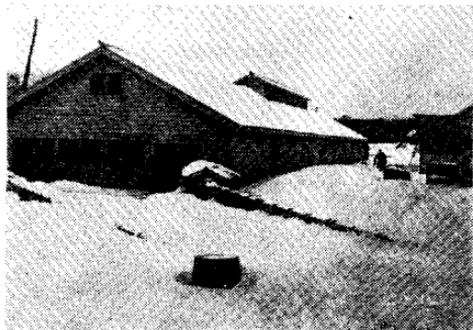


択捉支場ふ化室 (昭和9年留別)

この他、太平洋岸ウルモベツでべにさけ漁業を営む谷茂平氏は、大正4年ウルモベツ湖畔にべにさけ卵8,000万粒を收容する鉄筋コンクリート造りのふ化室(1,426㎡)を建設し、北海道唯一のべにさけふ化事業を実施するなど、官民ともに施設の整備に傾注した。

### 3. 事業成績

各場の創立時から昭和19年までにおけるさけ、ます別事業成績(親魚捕獲数、採卵使用

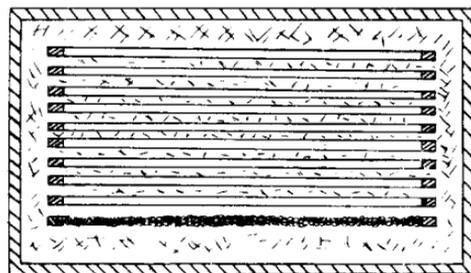


択捉支場、紗那事業場ふ化室(昭和8年)



択捉支場当路事業場(当路湖畔)(昭和9年)

数、採卵数、稚魚放流数)は別表1(択捉島さけ、ます人工ふ化事業成績)に示すとおりである。各事業場間の卵子移殖は殆んどなく、管外には昭和10年紗那事業場から十勝事業場(現十勝支場)にからふとます発眼卵300万粒を移殖したにすぎない。発眼卵を長距離輸送するときは「重畳式」と言って2cm



重畳式運搬箱の断面図

角の木製で、長さ62cm、巾27cmの枠に140cmの晒木綿を打ち付けた運搬盆とし、卵を約7,000~8,000粒を入れる。次に運搬箱の底に予め水を含ませた水苔を厚さ約10cmに敷き、運搬盆と水苔を交互に重ね周囲にも充填して荷造りする。時期は10月上旬で根室港からの定期船で発送するが、入港時間がはっきりせず、出荷申込みはしたものの事業場から港まで約2Kmガタ馬車で運搬したが、場員は大変苦労した。

(択捉支場に対比するため「国後支場さけ、ますふ化事業成績」(別表II)を付した。)

### 4. 事業実施状況

#### ① ま す

さくらますは融雪時期の4月上旬に接岸し、直ちに河川に浜上する。「郭公が鳴けばますが川に入る」と土地の人は言っており、この頃のますは川海老などで針につくことが知られている。そのためか、未明の深い霧の中、取締りの眼を避け、遠く近く郭公の声をきき乍ら大きな竹竿で半年振りに釣の醜態味にひたる人もいるが、その感じはまた格別とのことであるとき。

各河川ともさくらますの浜上数はからふとますに比較して遙かに少なく、融雪増水のために捕獲施設を早期に設置出来ないこともあって、後期浜上群の一部がからふとますに混獲されるが、大半は本、支流の上流域において7月上旬頃から見事な婚姻色を呈して天然産卵する。さくらますが多く浜上する河川は留別川で、昭和10年には5,755尾を捕獲し、175万粒を採卵した。

からふとますは各河川とも6月下旬頃から浜上し始め、7～8月が盛期である。最も多く浜上するのは留別川で、紗那川、別様川、薬取川がこれにつぐ。浜上数は来遊量の豊凶にもよるが、例年約100万尾と推定され、沿岸漁獲数に対する浜上率は約20～30%で、昭和18年の管内捕獲数は221千尾、採卵数71,230千粒であるが、昭和4年には非常に豊漁に恵まれ、各河川の本、支流とも親魚が層をなして浜上し、増水時には川巾の広がった分だけ更に浜上数が増加して、全く川に余裕のない程に魚がつまり、その数は大体300万尾と推定された。また減水すればその巾だけ魚が乾上って斃死し、両岸に死体が累積する状態であった。

捕獲場は浜上後約1カ月を経過した親魚が捕獲出来る地点を選定し、漁具は主として網ウライまたは曳網を使用し、当路湖では建網を使用した。留別川および別様川は比較的長期の蓄養を要するため、小川を利用して親魚の蓄養を行なったが、紗那川では5～6月に短期蓄養で採卵が出来るので浮生簀を使用し殆んど斃死はなかったけれども現在のような

積極的蓄養方法が行なわれていたならば、ますますだけで全収容設備が満たされたことと思われる。

また紗那川では毎年9月下旬から10月上旬にかけて、からふとますときけの交配魚が若干捕獲されたが、これは天然に交配したものと考えられ、殆んどが雄親魚であって型はさけのように大きく、鮮やかな婚姻色を呈していた。

## ② さ け

さけは8月下旬から浜上を初め、10月中が盛期で紗那川に最も多く浜上し、別様川、留別川、薬取川がこれにつぐ。初期に浜上するものは銀毛であるが、10月頃より沿岸でもブナとなり、捕獲場では即時採卵が出来る。増水時には若干の未熟魚或は半熟魚が捕獲される程度で、蓄養設備をする要は殆んどなく、河川によっては時期的に老魚さえ捕獲される。

親魚の年令組成は4年魚が約70%で最も多く、3年魚は25.8%、5年魚は4.2%である。雌、雄の比は各河川とも雄が多く、比率は約6対4となっている。また、魚体に比較して卵径が大きく、孕卵数は1,800～2,300粒で、北海道産の平均2,750粒よりは少なく、南千島のものとは別の系統と考えていた。捕獲事業終了後本場で纏める全道の捕獲、採卵成績表の択捉支場の欄に▲印が附され、欄外に「検討を要する」と特記されたことが未だに記憶に残っている。捕獲、採卵旬報は交通不便のため電信で報告することになっているが、幾つかの局を中継するためしばしば間違うこともあった。

ふ化成績はふ化用水温によって優劣が認められ、湧水を使用する事業場では約90%の好成績を収めたが、河川水を利用する事業場は冬期間のふ化用水温が2.0～3.0℃に低下するため成績も劣った。

昭和13年以降はさけ、ますともに捕獲成績が逐年向上し、紗那、別飛、および留別事業場などは事業計画の約200%に達し、ふ出直

前のからふとます卵を養魚池に撒布し或いは砂利層に埋没してさけ卵を収容した。

筆者が紗那において実施した埋没の方法は増水のない小河川で、河床が比較的高くなっている、その部分の小石が水面に若干現われているような砂利層の処を選び、巾2~3m、深さ0.2m位の溝を掘り、その中に発眼卵（ふ出近いもの）を1㎡当り約2万粒の割合で平均に撒布し、その上に笹竹のスタレ（熊笹を細い綜紹縄で編む）をかけ、さらに小砂利で覆う方法を用いた。この方法によると、河床が高くなっているため、砂利層も水が流れること、またスタレ伝いに河水が適当に流通するため成績は極めて良好であった。また、スタレを使用したことによってふ出状態や發育経過を調べるうえで大変便利であった。このようなことから、この方法を継続実施した。

紗那事業場は大正9年に新設され、本、支流の5カ処で捕獲事業を実施していたが、創立当時浜上の盛期は11月15日頃より約1カ月の間で12月25日頃には終了した。その後漸次浜上が早くなって、10月25日頃から盛期に入り、11月末には殆んど終了するようになった。また稚魚を放流した小支流にも年々親魚の浜上が見られるようになったので捕獲場を新設して「一ノ段捕獲場」と称し創立後20年を



紗那川支流一ノ段捕獲場のさけ浜上

経過した昭和16年および17年には紗那川全捕獲数の約75%（8万尾）を挙げるようになったが浜上時期が早くなったことと併せてこの著しい傾向は人工ふ化によるものと考えていた。

昭和12年10月上旬、さけ親魚の標識放流試験を実施したので記憶を辿り概要を記す。

1. 場所 散布岬沖（紗那より北約40Km オホーツク海に突出）
2. 標識尾数 200尾
3. 担当官 北海道さけ、ますふ化場折戻支場技手兼属野口良雄、紗那事業場助手八木沢喜家
4. 標識方法 赤いセルロイド標を銅線で尾柄につける（番号を刻む）
5. 再捕 附近の漁場で約20%が乗網し、紗那川で約35%有崩川で約5%、合計約60%再捕された（捕獲場と上流の天然産卵床で産卵後発見された2尾を含む）

なお、青森県庁から1尾再捕の報告をうけたが、国後水道を太平洋に出たものか、オホーツク海に沿って宗谷海峡を通過して南下したものが疑問視されていたが、その後は試験しなかった。

### ③ べにさけ

択捉は日本における唯一のべにさけの生産地であって、ウルモベツ湖、年崩湖および当路に入る。

#### ◎ウルモベツ湖

本湖は択捉島の東海岸に所在し、原始林に囲まれた面積5,818km<sup>2</sup>の本島最大の湖で、べにさけの繁殖地として有名であった。

べにさけ漁業を経営する谷茂平氏は、増殖のために人工ふ化放流を計画して、当時北海道水産試験場勤務の半田芳男氏の指導をうけ、大正4年（1915年）個人経営で1,000万粒収容のふ化場を設置した。その後は幾度か設備の改善増築を行ない、ふ化室も東洋一を誇る鉄筋コンクリート造1,426㎡、8,000万粒

収容の設備となった。この地は島内は申すまでもなく、函館、根室からも非常に不便な処で、谷氏の努力には並々ならぬものがあつたことを思い深く敬意を表している。

べにさけがウルモベツ湖へ浜上するには、約4 Kmのウルモベツ川の激流をさかのぼらなければならないが、毎年6月20日頃から9月頃までに浜上し、9月中旬から湖岸に接岸して産卵を始めるので、この頃から曳網で親魚を捕獲し採卵を行ない、終了は11月末から12月上旬である。稚魚は1カ年間湖内にとどまり、2年目に14~15cmの幼魚となり、6月20日前後から7月上旬にかけて大群を為してウルモベツ川を降る。川口から約300 m上流で調査した降下幼魚の体長は次の通りである。

3才魚平均	118.0mm
4才魚平均	146.0mm
3才~4才迄の成長度	28.5mm

なお、事業成績は別記する。

#### ◎年崩湖

本湖は面積4,065Km<sup>2</sup>、択捉第二の湖である。べにさけの浜上は6月中旬で、8月中旬頃より、湖岸に接岸して産卵をはじめる。

年崩事業場では湖内の曳網と流入する温泉川で1,000尾位を捕獲し、約50万粒を採卵する。

#### ◎当路湖

本湖は面積が1,358Km<sup>2</sup>であるが、西海岸では最もべにさけの浜上が多く、湖畔当路事業場では建網で捕獲し、未熟親魚は養魚池の水深を約1 mに高めて蓄養するが鮮やかな真紅色の親魚が群をなして遊泳する状態は、炎が水中を走るようで、誠に見事なものであつた。例年1,500~2,000尾を捕獲し、約80万粒を採卵した。

#### ④ 天然産卵

各水系は本、支流とも湧水が多量に流れ込んでおり、汚染源が全くないため水は極めて清澄で、放牧の牛馬は飲み水にしており、筆者等も別に気にすることもなく渴をいやすこともあつた。何れの河川も上流域は小砂利

の浅瀬が各所にあり、天然産卵床としての適地が多く、増水時に捕獲場を越えたからふとまず親魚が各所で産卵する。

11月の降雨は新雪を融して二重の増水となり、平水の約2~3倍にもなるため、捕獲施設は冠水して2~3日は手の施しようもないこともある。そうなると相当数のさけが捕獲場を越えて上流の湧水地帯に蟄集して産卵するが、場所によっては親魚が過剰のため産卵床が再び掘り返され、卵が流れ出して、ヤマベやオシヨロコマがそれについて丸々と肥っているのを見かける。

筆者はさけの浜上盛期に当る11月上旬の或る夜、捕獲場の状況を巡回したことがあつた。その途次、大木の根本にある湧水の溜りにさけの雌が揺鉢型の産卵床を造り、その中央に静止している姿を計らずと見かけた。「これは」と思って、なおよく目を凝らすと、雌を中心にして直径2 m位の円を描いて大型の雄が右に廻り左に廻っていたが、実に悠々たる貫禄振りであつた。天然のかかる生態を見たのは初めてのことでもあり、産卵受精状態はどうなるのかと傍らの木の根本に腰を下し懐中電灯を照らしてじっと成り行きを見守つた。すると、根本の奥に別の雄が2尾いるではないか。固唾を呑んでみているとその2尾は静止している雌を交互に狙って近づいてくる。先程の円を描いていた大型の雄が突進して侵入の雄を実力排除で追い返す。しかし2尾の雌は諦めることなく雌に近づく。そして追い返されることを何回か繰り返し一層雌に接近するようになると、大型の雄は奮然として突進し、侵入者の脂鱗辺をガブリくわえ、言うなれば「不法闖入者ツマミ出し」の態で、遠くに引き放し、物凄い速さで雌の側に戻る。これは総ゆる生物の種族本能、生態本能であるが、その熾烈さには驚いた。銀毛の時は特に目だたない歯も、産卵期になると吻端が彎曲し、鋭い牙に大きく変る実証を見たわけで、優生生殖の唯一の武器となる前述の過程をなお幾度か繰返して、いよいよ本命の

産卵、放精となる筈である。ふと現実に戻ると夜はしんと更けわたり、空一面の星は宝石の様に輝き川の流は一層静かに然も寒気は骨を刺し、歯の根も合わなくなってくる。このことを予想して巡回に出たわけでないため、防寒の特別な用意もなく益々寒さは募り、どうしても産卵するまで待てなかったので帰場の途についたが、今にして当時を想い起すとき、再び目撃することが出来ないだろうこの好機を失ったことは返す返すも残念でならない。

また、或る湧水に天然産卵した跡をみつけたので、小石を静かに取り除いてみると約200粒程のさけ発眼卵が径約40cmの処に中央が廻りより多く小石に介在していた。よく調べると不受精卵や死卵が殆んどなく、その後、臍のう収縮まで調べたが成績は頗る良好であり、湧水の箇所でも適当な条件が備わっていたように思われたが、天然産卵の成績には驚いた。

4月下旬から5月にかけて、これら天然によるさけの稚魚が流れの緩やかな処に蝟集しているのを見うけるが、非常に敏捷で近付いて掬うことは容易に出来ない。また、融雪増水の時には、水溜りとなった処に稚魚が封鎖されていることもあり、その時期には亀甲紗のタモ網とバケツをもって巡回し、封鎖水溜りの稚魚を掬って放すことも勤務の一つと考えていた。

さけ、ますの資源は積極的な人工ふ化と天然繁殖の保護とによって維持されることはふ化事業の方針であるが、この地は水質の汚濁等が全然なく、天然繁殖には絶好の環境が保持されており、その効果も大きなウーエトを占めていたことが、前記の実例によっても確証できる。

##### ⑤ 密漁取締

人口密度が少ない上に、部落を流れる川は紗那川、留別川、および薬取川だけで、他の川の流域には殆んど人家がなく、密漁も殆んどない。中には一攫千金を目論んでとって

も、根室や函館に送る船積みの際に警察の網にかかってしまうため、冬期中の食用として若干の密漁はあるがその数は僅少であり、また各河川とも区域が狭いので取締りも容易であるが、浜上期には取締監視員を使役し警察署と緊密な連絡をとり取締りを実施した。

筆者が天然産卵状況調査のため上流に行ったときのことであるが、支流からまた支流に入って調べた。どの支流も親魚が非常に多く、日中でも産卵床を掘っている。特に多い個所に印をつけたりして、帰りが遅くなり、そのうえ俄かに猛吹雪となって、日没後は殆んど視界がきかない程になった。放牧馬だけが通る小道を辿り苦労してようやく道路に出て、ひたすら帰りを急いだ。そのとき、吹雪の中から突然馬が現われ仰天した。見ると、馬上には向い風の吹雪を避けるために、スキー帽をすっぽりかぶった人が乗っている。その者は筆者がふ化場員であることをさきに気が付いたのか、こちら以上に驚いたようで馬から飛び下りて笹藪に姿を消した。みると裸馬には大型のカント袋が振り分けに掛けられ、さけが一ぱいに詰っていた。密漁しての帰りであろうが、折からの猛吹雪のため不意に出会う結果となり、馬もろともこちらの手に入っては運のつき、早速警察に引き渡した。しかし、前記の状態で人相など全く判らなかつたが馬が証拠となって犯人が検挙され、大型のさけが70尾程入っていた。また、或る寒の降る寒い朝、なに気なしに窓越しに外をみるとふ化室の裏に防寒帽に印半天を着て、ズックの袋を肩に掛けた不審な男がうろついている。とっさに放牧している牛馬の見廻りを装い捕獲場を荒しに来たものと判断し、早速行って尋問すると、その男はやおら防寒帽のボタンをはずし名刺を出すではないか、見ると赴任後間もない紗那警察署の巡査部長で、密漁の一斉取締りのため陣頭指揮の巡視中とのこと、面識がなかったこととは言え誠に恐縮したこともある。

##### ⑥ 稚魚の保護

人工ふ化事業の効果の実質的な向上を計るには雌親魚使用率の向上および採卵から放流までの減耗の少ないことをもって成績の良否を決定している。しかし、更に放流後稚魚が河口まで達する日数、沿岸に滞留する期間などを調査して稚魚の積極的保護のもとに回帰を期待する。従って稚魚が降海する際の河川内の減耗は害鳥、魚の食害が大きな要因と考えられるので、放流河川、湖沼の害鳥、害魚駆除を実施した。放流してから海までの距離は留別、別飛事業場が最も長く、約20Km、他は2～5Kmにすぎず、当路、年萌事業場は養魚池より直ちに湖に放流し降海する。

さけ稚魚が放流後河口を通過するのは紗那では5～6日である。なお、沿岸に滞留中混獲されることは全くない。6月上旬から7月上旬沿岸の雑魚、ます定置に稚魚群が乗網するが、約10cm、体色は光沢ある青味を帯び、非常に敏捷で網目より素早く抜ける。この頃を最後に寒流に向って北上し姿を消す。

害魚はイトウ、アメマス、オシヨロコマなどで刺網、曳網を使用して駆除する。

害鳥は養魚池では烏、川烏、湖沼では主に鴨類で、当時は警察署よりの「有害鳥獣駆除願」（期間は周年）によって、熊2頭、烏、鴨類各100羽などの許可をうけて駆除に努めた。筆者はブローニング五連銃をもっていたので駆除したが熊はとれなかった。

以上のような害鳥、魚の他に河川から用水引用などと考えられるが、択捉支場管内では各河川ともこれらはなかった。

## VI 事業場の環境

各事業場とも部落より10～20Kmは離れており、道路は殆んどふ化場の専用である。熊笹の生い茂った山道や広い湿地帯を横断し、春の融雪時と10月頃の降雨増水時には一帯が冠水して何日も不通になり、所謂、陸の孤島と化してしまう。

唯一の交通機関は道産の乗馬によるほかはなく、時には漁場の発動機船に便乗すること

もあるが、浜に出るまでに相当の距離があり、また折角でも天候によっては船もでられず、あてにならない。このような環境であるから、子供が学校に入るようになればどうしても家族を部落に移し別居するより方法がなく、中学校（現在の高校）以上になると、根室町か函館市に出すことになる。かかる時、昭和13年から同16年まで択捉支場管内8事業場のさけ親魚全捕獲数25万尾（当時の払下契約は老幼大小を問わずといった条項で尾数を単位とし、一年契約）を一括払下契約者である青森市の若井善蔵氏に択捉支場を初め各事業場員の不便な勤務、不自由な生活、殊に子弟の教育について実状をいろいろ説明した。また当時のふ化場は択捉、国後ばかりでなく、本道内でも同様に極めて恵まれない環境にあった。

若井氏は冷蔵船をもって大きく海産商を営み、偉大な体躯の篤志実業家であり、子弟教育の不便なことに共鳴された。それで、同18年9月に職員の子弟教育の目的に「若人寮」をふ化場に寄附された。内容は8畳と10畳間の修養室および6畳の5個室をもつ木造平家建て（213.62㎡）で、それ以来これを利用して札幌の学校を卒業した子弟も多く、恩恵によくしている。筆者の長男も4年間お世話になった。その後同24年10月北海道鮭鱈保護協力会連合会によって、4室が増築された。（61.25㎡）若井氏は昭和42年に72才の長寿で逝去されたときが、若人寮設立当時の事情を憶い起し、今後とも有効に利用することをお奨めしたい。

医療施設としては全島に僅か3人の村医（各村に1人）がいるだけで開業医がなく、全科の診療に当り「トラバサミ」と陸口された老医もいた程で、歯の治療や手術を要する患者はどうしても本道に渡らなければならなかった。

郵便物の配達局からの距離によって月3回～6回または10回になっているが、冬期間は吹雪などで遅配になることが普通である。

筆者が只一人で部落より約10軒ほど離れた事業場附近に人家のないのに勤務していたとき、尋ねる人もない孤独の生活には精神的にも窮し、友人にハガキを頼んで月3回投函してもらい、10日毎に配達人の来る日を何によりの楽しみに待っていたこともあった。交通の項にも記したように、殊に冬期中は荒天と流氷のため、本道との定期航路は12月10日頃を最終便として杜絶し、翌年4月下旬、流氷の状況によって航路が再会されると、旧年と新年の手紙や新聞、小包など一度に配達になる。待つこと久しい船便の再開は、島に越年する者の唯一の楽しみであって、なんとはなしに気分が晴々とし、唯でも微笑をうかべている。

或る冬、郷里の栃木から送られてきた正月の餅や衣類、菓子などの小包13個と手紙など3人の配達人がスキーで深い雪を踏み越えてドッサリ届けられた。3人には些か気の毒に感じたがその喜びは格別のものであった。早速開いてみると菓子は砕け、餅には黴が生えていたが配達人にもご馳走して労をねぎらった。一年のうち正月以外に餅を食べることがない当地としては、思いがけがないご馳走と皆に大変喜ばれた。

冬期中は北西の季節風が多く、吹雪の連続である。市街地から約30kmも離れている或る小部落では年末に20日程吹雪が続いたため、隣部落との行き来も杜絶し、そのうえカレンダーもなかったのか一日遅れて元旦を迎えたなど、浮世離れた笑話さえあった。

また新年会開催の通知をうけたことがあるが、それに「荒天は千島の常であるから延期しない」と添書きされていた。このことから、毎日強風か吹雪であることが窺かがわれると思う。

千島と云えば第一に熊を連想されるが、熊は眼よりも嗅覚神経が非常に鋭敏で、風下にいる時は人間の気配を素早く察知して容易に姿を見ることがなく、人に危害を加えることは殆んどない。しかし、増水などで捕獲場を

越えた親魚の状態を調べるため笹を越えて上流に行くときは一人で行くことを避け、ラツパカ空罐を打ち乍ら奥に入ることになっていたが、よく川淵に熊がたたき上げたのか、処々にさけが死んでいるのを見かける。

択捉支場（昭和9年から同15年まで留別村に所在し、その後紗那村に移庁）は留別市街地より留別川に沿って約20kmあり、この附近は熊の出没も珍らしくなく、職員の野口良雄、郡山茂利雄、下山卯之松（現湧別事業場長）、関谷定雄（現雪裡事業場長）、大沢茂夫（現薫別事業場長）、岡本辰蔵、小路口保三郎氏等は3月中旬頃よくスキーで附近の山に熊狩りに出かける。一行は南斜面の大木の根本などにある冬眠中の熊穴を見つけてはおびき出し、何匹もの犬に追わせて射止める。一同は心得たもので予め鍋や調味料を用意して行き、現場で早速熊汁をして弁当を頬張り、毛皮と腎臓（俗に「熊の胃」という）だけを持ち帰るといふ実益を兼ねたレクリエーションであった。熊は冬眠中に子を生むが、必らず双子であり生捕りにして飼育することもある。しかし成長と共に兇猛性を帯びるので、飼育しても精々満一年位であった。また暖かい日には堅雪の南斜面で親熊が子熊と尻滑りをして戯れていることもあるときく。現在、本場長室に小熊がさけを笹に通してかっいでいる剝製の置物があるが、あれは、その頃生捕りにしたものである。

筆者は熊がさけをとろうとしている処を見たことがある。紗那事業場でさけの浜上盛期になると未明に起きて、4捕獲場を巡回して浜上概数を調べ、当日の作業計画や人夫の配置などの予定をたてることにしていた。

4捕獲場の中で最も多くさけが捕れる処は川巾が約20m、水深0.6m位で毎日3~4,000尾が捕獲できる木ウライ装置で曳網を使用する。ここは日暮から浜上初めさけが重り合って、棒などを投げ入れても容易に流れないほどに詰ってしまう。夜が明けるとカモメ、鳥など飛び舞うので、ウライの下に餌集したさ

けがどンドン降ってしまう、そこで両岸のハンノキの立木にワイヤロープを張り、網に鎖をつけて、カーテンのように装置し、それを未明に引いて川を完全に遮断し、降下を防止することにしていた。ところが或る大霜の寒い未明、川の中程にかすかに黒いものが見えるので不審に思い、腰を屈めて水面をすかしてみると動いている。咄嗟に熊ではないかと思った。夜がしらじらと明けて、熊であることを確認した。よくみるとなんと熊が上流に向かって川の中に腹ばいになっているではないか。さけがる〜尾づつ水面に背を出して大きく水しぶきをたてて、次々に下るのを立上っては前足でたたこうとしている。熊からは約25mの距離しかないが、彼の方から風が吹いているので一向に気がつかない。しかし突然の上に初めて見たので若し襲われたらと、大きなハンノキに身をひそめてみていた。日頃想像していたのとは異って、猛獣とは思えない姿で、甚だ鈍い動作である。11月頃になると、冬眠の用意に特に食欲が付き、5〜6尾づつ間断なく下るさけをどうしても捕りたいのであろう。左に右に何度か立ち上って捕ろうとしているが失敗し、その度に残念そうに後を振返って見る。真剣そうに見えるが1尾もとれない。珍らしいことでもあり、また官舎も500m位離れた所にあったので、走って戻りこの事を同居していた関谷定雄、吉田俊男（前羅臼事業場長）氏に知らせた。彼等はまだ寝ていたが早速飛び起きて、手に手にハンマーや金テコを持って駆けつけた。だが時遅く熊は笹やぶの中に入ってしまい、足跡を残すだけであった。関谷氏らは落葉の霜を強く踏んだ足跡からみて大体3才位といつていたが、それにしても「綿毛が多くなった毛皮が惜しい」と熊をみればハンマーなどでも捕ることを考えている彼等には些さか驚いた。その後、捕獲場の附近や乗馬での旅行中に何度か出会うこともあったが、逃げるが勝ちの戦法をとった。

娯楽施設などは殆んどなく、冬期中のスキ

ーは寧ろ実用的なものであった。冬の長い夜は蓄音器を聴く程度で、レコードはカタログを見て求め、お互に交換し合う。電気がないので各家庭では灯油のランプを使用し、非常に不便であった。ラジオは乾電池を用いたが、故障のときこれを修理する技術者がいないので聴取するのは一部の人だけであった。

筆者は昭和11年、5球式ラジオ、アンテナ共一式で60円也奮発して取り付けた。当時択捉支場の野口氏は機械に興味をもち、ラジオを組立てる技術をもっておられたので、紗那に出張されるのを待っては何時も調整してもらった。大東亜戦争が勃発してからは、特別ニュースとして軍艦マーチに続いて放送される南太平洋方面の戦果には胸を躍らせてききいった。

なお昭和8年には択捉島水産会倶楽部ができ、玉突台、麻雀、囲碁、将棋などの娯楽が設備されて、島内漁業関係者が紗那に出張の折休養の場となった。そこで筆者らは玉突、麻雀を初めて楽しんだ。玉突は一ゲーム10銭で持点が50点位、麻雀は「遊び方」の小冊子を見て始めたが、その後大変流行した。

管内の出張はリュックを背負って乗馬カスキーを利用するが、乗馬で山道に入ると第一に熊が気になる。そこで彼に察知させるため馬の首に鈴をつける、馬は駅逦（北海道庁から補助をうけている旅館）か、業者から借りるが、筆者は馬をもっていた。トロッター雑種で足が軽くて感性もよく、乗馬としては申分なく、毎年8月上旬の紗那競馬会に二流組に出場したこともあった。休日には乗馬の大変好きな村医と遠乗りしたこともある。落葉松が新芽を出し若草が伸び始め、雲雀が空高く囀る5〜6月の頃海岸沿いの野原を、またアスファルトの様な干潮の渚の乗馬は大変爽快であり、未だに記憶に残っているが、現在自家用車を持って乗り廻すことと同じように考えられ隔世の感がする。

スキーは冬期欠くことが出来ないものであるが、出張する時は気象が急激に変化するの

でラジオの予報に注意し、弁当の他にスルメや寒くても固くならないキビダングなどを用意し、午後早く到着するよう早朝に出発する。

各部落には商店があって日用品は求められるが、商品の流通が少ない上に海路の運賃や諸経費がかさみ、本道に比較すると3~5割、商品によっては10割位高いものもあった。衣服類は札幌、函館、東京三越などより毎月送られるカタログ、または生地見本によって代金引換の通信販売で求める。然し、早速必要なものが入手するまでには2週間或いは一カ月位を要し、時期を失してしまうこともあった。時計の修理や服のクリーニングなどは、根室か釧路に送るなど総てについて大変不便なものであった。

少しでも安価にと思って、或る秋、場員が長い冬期中に必要とする日用品の注文をとり纏め、根室支庁に勤務していた牧野三広氏（現東利尻町長）に依頼したこともあったが、勤務の忙しいところ大変ご迷惑だったことと想う。以上は一部を述べたにすぎないが、老門事業場は留別市街より約30Km、当路事業場は別飛より約45Kmもあって、附近に人家もなく勤務は申すまでもなく、家庭的にも職員は大変苦勞された。

昭和14年、択捉支場長の石井久治氏が虹別支場長に転出され、後任に紗那事業場主任の水戸部勝次氏が就任した。当時択捉島の各官衙は紗那に所在しており、また管内の略々中央に位置するため、同15年択捉支場を紗那村に移庁して、紗那事業場は支場に包含し、前択捉支場は留別事業場となった。

昭和9年4月にふ化場が国営移管になって以来の支場長会議は例年3月下旬か、4月上旬に開催されるが、船便がなく出席できない。5月上旬支場長が参庁して、新年度の予算、事業計画が指示される。事業場主任会議は昭和15年より開催された。

本場から択捉に出張された方は昭和12年度主任（現在の総務課長）の江花常与氏、同

13年場長斎藤光雄氏、同17年営繕係神谷氏の3名だけで、支場と2~3の事業場を視察された。江花氏は9月中旬石井支場長と紗那事業場に来場の折台風で増水し養魚池が濁流で被害の直後であり、状況を説明し、なお本流より溢流してふ化用水源地一帯が冠水した現状を小川伝いに地下足袋を履いて、ブユ、ダニの多い熊笹を越えて約3Km案内したが大変苦勞された。

斎藤場長は就任後間もなく虹別支場から択捉に渡られたが、支場到着早々脳溢血で倒れた。現地では充分の治療もできないのですぐ根室に引返し根室病院で死去され誠に気の毒であった。

神谷氏は択捉支場管内の建物、工作物の実状調査のため来場されたが、時期的に北西風の強いさけ漁場の切揚げる10月下旬で、支場（紗那）で管内の現状を説明した後筆者が、馬で別飛事業場（主任丸井喜久治）、当路事業場（主任木戸口伊兵衛）を案内した。往復約160Kmの行程だが老体の上に初めての乗馬、時々糞さえ吹きつける寒い時期であり、道路も悪く大変苦勞し半病人のようになって漸く紗那に着いた。その後留別事業場（主任下山卯之松）、羅臼事業場（主任長谷川友之助）の予定をとりやめ、筆者宅で船待ちの5日静養されたことを想い出す。氏は一人子が北大卒業直前に死去、前年に夫人が急死し孤独とか、大変気の毒な境遇ときく。

千才に所在した本場が札幌市郊外の、当時一帯が林檎畑だった現在地に一際目立つ木造モルタル二階建の立派な庁舎が新設され、昭和12年7月10日移庁式が挙行された。支場長始め各事業場主任が揃って出席し、刺戟の少ない避地勤務の職員には、立派な庁舎と盛大な式典には、大きな誇りと驚きを感じた。なお、事務室の正面に「以和為貴」の大きな額が掛けられていたことが印象に残っている。

（口絵択捉島鮭鱒ふ化所位置図参照）

昭和16年12月8日に勃発した大東亞戦争によって、職員は次々に応召され、漁夫の雇傭

も困難となり、加えて綿網などの捕獲資材は統制されて、逐年極度に窮屈になった。かかる折の昭和20年7月、紗那事業場養魚池の修繕工事を業者と契約したが、その直後の8月15日に突如として終戦となった。しかも、無条件降伏であり、今後どのようにするのか、根室との船便は杜絶え、島民共々極度の不安と焦燥を感じ乍らも如何とも方法なく、本場長(野田信俊氏)から何等かの指示があるものと信じ待っていた。とりあえず前記の工事

について、本場に電信で照会したところ、「契約通り続行せよ」との回答があり、終戦後の情勢や推移は全然わからない乍らも、返電によって幾分安らぎを感じた。こんなとき、近くソ連軍が択捉に上陸するとの情報があったので、支場の諸帳簿類は構内の砂地に全部埋めたが、事業成績台帖二冊は最後までと思いい、厚表紙をとり、筆者個人のものとして保管しておいたが、引揚げる時に写真機と共に埋めてきた。

### 終戦当時の支事業場職員

(○～応召)  
(●～戦死)

場名	支場長又は事業場主任名	職員
択捉	水戸部勝次	八木沢喜家、吉田俊男、池原敬、○小山内恭治 木下秀一、崎野祐孝、佐々木タミ、蔵原悦子 千葉静江
留別 羅臼 年崩 当路 別飛 比良糸 老門	下山卯之松 長谷川友之助 関谷定雄 ●木戸口伊兵衛 新妻六郎 臼井義雄 小路口伝三郎	大沢茂夫、岡本辰蔵、梅原可雄、多田新蔵  吉田貢一 竹内武三

### Ⅶ 終戦後のふ化場

ソ連は日本に対して8月8日宣戦布告、翌9日樺太に進攻開始、北千島占守島に同18日上陸し一部では交戦した。択捉島には同28日無血上陸し、紗那港は約200名が上陸、直ちに警察署を接收して署長以下8名が留置された。小高い丘の警察署庁舎には終戦まで毎月8日の「興亜奉公日」には、屋上高く日章旗を掲揚していたが、この日は「鎌とハンマー」のついた大きな赤旗が掲げられた。その日私達は始めて敗戦を現実と感じ、万感胸に押しつまり只々茫然とした心境であり、今なおはっきりと記憶に残っている。次いで測候所、郵便局、無線電信局も接收されて本道との通信は全く遮断された。この日いち早くラジオは、スターリンの声明で「千島列島はソ

連が領有するであろう」との報道を伝えていたが、今後どのようにするのか、不安の中にも引揚船が迎えに来るものと考えていた。よもや3年2カ月も抑留されるような事になるとは当時だれも想像しなかった。

間もなくソ連軍の民政部が置かれてラジオは接收され、また隣部落との連絡さえ遮断されて全く孤立し、焦燥は不安を生み、想像はデマとなって流れ、人心動揺の中に連日民政部から使役を課せられた。ソ連軍の上陸によって、管内の事業場は2～3を残し接收解体のうえ他に転用されたが、紗那事業場は民政部によって従来通り事業を続けることになったので、場員は一般村民のように毎日変わった場所での使役は免れた。なお管内で事業を実施するようになったのは紗那だけであった。

ソ連のふ化場担当者シツカロフ氏は「樺太

魚族資源保護局より派遣された。この方は以前日露漁業条約によって日本がカムチャツカに出漁のとき、露国の係官として勤務し前に函館市に二度程来ており、湯の川温泉にも行ったとのことで、日本語も日常会話には通訳を必要としないばかりか、「酒は涙かため息か」を歌う程であり、親しみを感じたがふ化室入口に「鎌とハンマー」のソ連マークを大きく赤で書かれても当時の吾々としては如何ともすることが出来なかった。

ふ化場担当と言っても事業については、こちらの計画によって進められた。吾等も月日の経過につれて気分も幾分落ち付くようになった。部隊も駐とんし、民政部、漁場、捕鯨部のソ連指導級が渡島し、日本人住宅のたちのきを命じ入居する数も多くなった。彼等の大好物のオシロココマを捕ってふ化槽に養い、砂糖、煙草、スエルト(アルコール90%)などと交換したこともあった。憂さ晴らしに一杯欲しいことは誰でも考えており、いろいろ苦勞してドブロクを造った。日数も充分経過したので味も上々、早く飲みたいが隣部屋にいるシツカロフ氏に隠れて飲むことも出来ない。いろいろ相談の結果、筆者の結婚祝に彼を招待することに満場一致決定した。彼も大変喜んで一同が契めるままに上々機嫌で、カムチャツカの漁業状況、湯の川温泉の芸者の話など大変賑やかな観楓会であった。彼は翌日二日酔で頭があがらず臨時休業することになり、計画は大成功だった。

彼は或る年の1月40才位の紳士を連れて来た。ふ化室を見学しての帰りに筆者は要請されるままにスキーを貸した。その後、何回か来場して技術的な質問にも答えたが会話殊に技術語は通じないので、半田芳男氏の著書「鮭鱒人工繁殖論」をもって説明したが、非常に熱心で2~3度宿ったことさえあった。聴けば以前大学教授のとき世界第二次戦争の対独ソ戦で3年間捕虜生活の経験があるとき。本を2~3日は是非借用したいとのことであり心安く貸した。その後、しばらくして来

場したので、スキーと本を請求したところ、彼は「自分が捕虜になった時には総てをとられた」とのこと。そして、当然自分のものだと態度を示したので返済するよう強く要求したが応じようとしな。そればかりか敗戦国民に侮辱された、と言うような言葉で声を振るわせ激怒の態で帰った。筆者としては当然のことを言っただけであるが貸したスキーと貴重な本は諦めるより仕方なかった。それから5日後紗那のゲーペウ司令官(階級は中佐)より出頭を命ぜられた。突然でもあり別に心当りはないが考えると「生殺与奪」の独裁権をもつ機関だけに一抹の不安を感じた。早速出頭すると司令官より氏名、生年月日、履歴など問われ、ふ化事業の内容、思想的の面まで調べをうけたが通訳はソ連少尉で充分通じない。最終的には「勤務、日常の行為、思想があくまでも赤軍に反対している」とのことで、3日間留置され、その間同じような内容を何度か調べられたが、事実の有無に関係なく、シベリヤに送られて強制労働を課せられるのではなからうかなど内心沈痛不安なる日間であった。留置中自宅捜索され特に書籍を調べられた。その後3度出頭を命ぜられたが、2月11日が最後であり、建国記念日であったので今でもはっきり記憶している。

このことで思い当ることは某氏の執念深い陰謀報復と考えているが、それにしても「鮭鱒人工繁殖論」は翻訳されて、ソ連のふ化事業の指針として大きく役立っているものと信じて自らを慰めている。赤軍は思想的にリストした者は要注意として常に監視するとか、あとで聞いた。

その後、係は3人変り、昭和23年レーニングラードの水産学校を卒業した20才の女性技術者が担当となった。彼女は樺太に6カ月程勤務したとき、日本人宅に同居して同じ位の娘と大変仲良しだったとか、言葉はどうやら通じるに至って快活な性格であった。筆者等は例のドブロクで心ばかりの歓迎会を開い

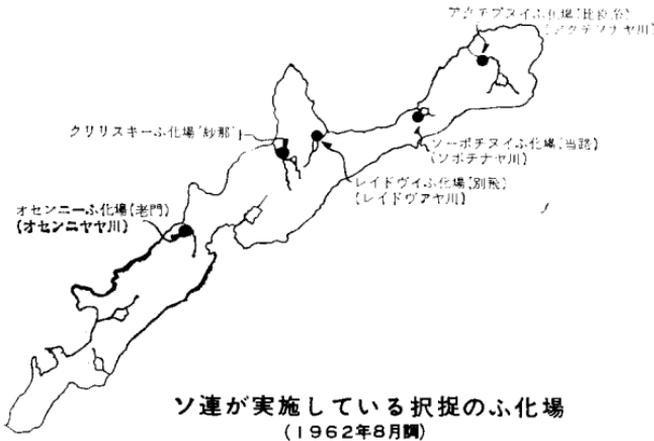
た。献立では、ます路、ウド、コチヤクなどの野草よりなかったが、彼女は大変喜んで、羊や果物の罐詰などもって来た。久し振りに珍らしいものをご馳走になり、海蛸で鯛を釣ったようなものだった。その後、彼女は駐屯部隊の中隊長と親しくなり、月給日には飲んで、踊って夜を徹することもあった。

しかし、採卵や卵の管理についての技術面は殆んどわからずこちらから指導した。採卵後の親魚は漁場主任から譲渡について強く要請されたが断じて応じない。加工することもなく、衛生上よくないとのことで、附近に穴を掘って全部埋めた。命令系統ははっきりしているが、横との折衝は全くなく、国家組織とは言え誠に非生産的なものと考えた。

民政部が置かれてから満一年は賃金、食料の支給がなく、各自手持ちの食料を細々と食いつなぎ、甘味品などは腕時計、万年筆、衣類などと交換して過した。

昭和21年9月、体が弱くて、労働に堪えられない者および扶養家族の多い者が、一部引揚げた。その後、給料が支給されるようになり、配給所で黒パン、バター（米国製）その他日用品がどうやら求めることが出来るようになった。また、さけ、ますふ化事業、捕鯨事業関係者には特別に朝鮮米の配給があった。筆者は月給950ルーブル（バター1Kgの価格65ルーブル）の支給をうけ、うち5%は国債で渡された。

また、樺太庁の拓殖計画で、さけ稚魚10万



尾の標識放流をすることになった。薬品、器具および賃金などの実施計画をたてたが、薬品や器具を手配しているうちに時期を失した。しかし、ソ連もさけ、ますの再生産を積極的に推進しているように感じていた。

昭和23年10月上旬、全日本人に待望の引揚命令があった。想えば20年9月から満3年余、本道との通信、交通が全く杜絶して国内の情勢は全くわからず、想像に想像を重ねて一日も早く帰国できる日を待ちつづけてきただけに、その喜びは大きかった。常に心掛けていただけて引揚げの準備は早い。いよいよ

ソ連の貨物船に乗り込んだが、朝夕目に映っていた散布山は早くも雪化粧して択捉富士の偉容を示しており、永く住んで第二の故郷とも感じていただけない、再び踏むことができないと思うと、一抹の寂寥を感じつつ、西風の寒い夕暮樺太の真岡に向け出港した。真岡では約一週間軽労働に服したが、10月30日函館港に上陸した。

その後、択捉は樺太と共にふ化事業が積極的に推進され、昭和37年には5ふ化場が実施されて、その設備状況は次の通りであるという。

場名	収容		設備		日本名
	さけ	ます	べにさけ	合計	
	万粒	万粒	万粒	万粒	
アクチブヌイ	150	1,000	100	1,250	比良糸
ソーボチヌイ	500	—	100	600	当路
レイドブイ	2,000	2,000	—	4,000	別飛
クリスキー	2,000	2,000	—	4,000	紗那
オセンニー	250	1,000	—	1,250	老門
合計	4,900	6,000	200	11,100	

サハリン、エトロフにおける、さけ、ます稚魚放流数 (1963年調)

年次	さけ	からふと	ます	くらす	計	備考
	千尾	千尾	千尾	千尾	千尾	
1955	90,800	40,000	4,400	135,200	} ふ化場数24	
1956	92,400	82,000	5,000	179,400		
1957	79,600	110,600	7,300	197,500		
1958	167,500	81,700	2,600	251,800		
1963	263,400	70,100	900	334,400	サハリン, 20, エトロフ, 5計25 外にさけとからふとますの交配種 40万尾	

参 考 資 料

1. サハリンにおける、さけ、ますの天然産卵と人工ふ化の規模の比較

ポリシヨーイタコイ川

年次	天 然 的	人 工 的		備 考
	産卵上親魚数	捕獲親魚数	放流稚魚数	
	尾	尾	尾	
1958	250,000	19,530	27,550,000	
1959	50,000	21,444	28,393,000	
1960	—	64,455	37,690,000	
1961	140,000	40,500	32,214,000	
1962	36,500	41,684	34,809,000	

(産卵派上親魚数は捕獲場より越えた推定数)

2. さけとからふとますの交配について  
カーニンスキーふ化場(多蘭泊)

さけ♂×ます♀, 受精卵約30万粒から稚魚, 21,300尾を1953年試験的に放流した処, 3年目の1955年同川で, さけでもなくますでもない交配種親魚2,500尾の回帰が認められた。非常によい回帰率であったことから, カーニンふ化場では交配種の生産を試験的規模で, この年から継続して行くことになっ

た。交配種は頭部, 背鰭および尾鰭などはますに似て, 体部, 鱗などはさけに類似している。

昨年(1969年)11月ソ連漁業調査団一行4名を網走, 斜里, 岩尾別事業場に案内した際, 択捉島におけるふ化事業の現況をきいた処, 重点的に元の紗那, 別飛の2カ場を拡張整備し収容設備は紗那8,000万粒, 別飛5,200万粒, 合計13,200万粒とのことであったが, その成績については余り触れたくないようであった。

む す び

終戦後既に25年を経過し, 択捉は国後と共にソ連の極東漁業基地として, 漁場, 港湾施設罐詰工場なども整備され, 水産物は著しい生産実績を挙げているとき。しかし, 択捉, 国後, 色丹, 歯舞の諸島は我が国固有の領土であり, かつての島民は「島よ還れ」を悲願として, ソ連に返還要求を繰り返している。この地は100年以上も昔から終戦まで, 日本固有の領土としてソ連は勿論, 世界的にも認められ, 決して武力や不法占領によって

日本領上となったものではないことは自明のことである。しかるに、ソ連は昭和20年4月5日、日ソ中立条約廃棄を一方的に通告し、また対米、英和平交渉斡旋依頼のため、近衛公爵をソ連に特派させたことについての回答もせず同8月8日、突然、対日宣戦を布告して、樺太、千島列島に侵入し、以来今日まで和平条約締結のままソ連軍の占有支配下におかれている。

北方領土、北方海域は沖繩返還決定後の最大懸案となっており、昭和44年に発行された建設省地理院作成の新日本地図では北方領土を日本領土として取り扱い、更に同年10月には返還促進の啓発機関である特殊法人「北方領土問題対策協議会」（会長鈴木九平氏）が発足した。また昭和45年5月1日には「沖繩、北方対策庁」が新設され、北方領土に対し初めて政府としての窓口が開かれた。今後は一層国民の与論を結集して国際世論を喚起し、ソ連の良識に訴えて一日も早く平和的返還が実現することを望んで止まない。そして、先輩の残した古い歴史と豊かな実績を挙げたあのふ化場を、再び我が国の優秀な技術によって再開したいと願っている。

想えば、択捉島は気候も悪く交通も非常に不便で、生活、文化の面でも極めて劣悪ではあったが、そのような環境のなかで唯さけ、ます再生産のために努め、事業成績の向上を唯一の楽しみとし、誇りとして勤務したものである。今になって、20余年の歳月を顧みると、択捉支場で苦楽を共にした職員の多くは転職し、または勇退し、中には消息不明、あるいは鬼籍に入るなど、現在僅かに5名を残すにすぎない。

近年、ふ化技術および調査研究は大きく進歩し、多くの成果を挙げているが、所謂、昔を尋ねて新しい飛躍を目指すとき、択捉島の状況を知る残り少ないふ化場職員の一人として、択捉島さけ、ますふ化事業の沿革、事業実施状況、事業場の推移、環境および日常生活の一端など、記憶を想起して纏めた

が、現状と比較して考えるとそれなりに大きな意義があるかと思われ、関係する方々の参考になれば幸である。

しかし、「心あまって言葉足らず」で、いざ筆をとってみると充分意を尽せない憾が多く、また終戦占領という事態、引揚時に於ける所持品の検閲で資料や写真の殆んどを失って、多くを載せることができない。ここに挿入した写真は戦局が急を告げる昭和20年5月家族を本州に引揚げさせたとき持参したもので、今となっては貴重なものとなった。

加うるに20余年の歳月の経過で記憶もうすれ、多くの遺漏、誤認もあるかと思われる。この点のご諒承を願うとともにお気付の点があればご教示を願いたい。

昔から血と汗で開拓した北方領土を故郷とし、祖先の霊が眠る数多くの島民、ふ化事業に青春の情熱を注いだ筆者たちは、ひとしく「島よ還れ」の願いをこめて筆を擱く。

なお執筆に当り、次の文献を引用させて頂いたことを附記し、茲に深く感謝の意を表します。

1. 択捉島漁業誌（1937）八木沢繁次
2. 北海道における鮭鱒漁況の変動に関する研究（第1報）（1951）三原健夫外3名
3. 択捉島湖沼調査報告（1954）高安三次  
近藤賢蔵  
大東信一

.....  
「島よ還れ」

山口祐功作詩

1. 白い頂　　ふるさとの  
遙かな山は　チャチャヌブリ  
とぶとぶ雲に　想いを馳せて  
島よ還れ　我が国後よ
2. 碧い広がり　ハボマイの  
霞んで見える　島や島  
ただよう船に　想えをのせて  
島を還れ　我が色古丹よ  
紺碧の海　忘れず

附表 1

扱捉島さけ・ますふ化事業成績 (単位: 捕獲数, 採卵数=尾: 採卵数, 放流数=千粒)

1. さ け

(1) 扱 扱 支 場 (紗那川)

年 次	捕 獲 数			使 用 数			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
大正									
1920	9	6,539	7,145	13,738	6,543	6,515	13,058	13,242	11,600
1921	10	5,757	6,293	12,050	5,279	3,941	9,220	11,645	10,429
1922	11	6,798	5,850	12,648	6,076	3,032	9,108	13,420	12,390
1923	12	13,120	14,820	27,940	11,705	9,834	21,539	18,220	16,166
1924	13	4,352	2,742	7,094	3,822	2,254	6,076	9,225	8,460
1925	14	3,780	4,761	8,541	3,064	1,570	4,634	7,435	6,202
1926	15	14,068	28,748	42,816	11,408	7,130	18,538	27,100	24,680
昭和									
1927	2	16,378	17,358	33,736	13,106	8,220	21,326	28,600	26,275
1928	3	10,306	8,081	18,378	8,134	5,500	13,634	18,150	16,421
1929	4	4,699	4,220	8,919	4,293	3,178	7,471	9,450	8,605
1930	5	9,680	18,003	27,683	8,407	6,318	14,725	19,522	17,082
1931	6	16,178	30,726	46,904	11,700	6,000	17,700	28,070	24,823
1932	7	5,452	11,682	17,134	5,443	2,105	7,548	12,733	11,763
1933	8	10,756	20,416	31,172	9,229	3,974	13,203	18,837	17,345
1934	9	9,923	16,954	26,877	8,937	3,907	12,844	19,292	17,868
1935	10	8,607	13,278	21,885	7,442	3,838	11,280	15,217	14,149
1936	11	8,767	14,691	23,458	8,190	4,493	12,683	17,105	15,924
1937	12	16,002	25,712	41,714	13,929	8,434	22,363	30,126	23,816
1938	13	17,741	38,332	56,073	15,496	8,043	23,539	36,345	30,061
1939	14	23,916	47,144	71,060	16,704	8,101	24,805	36,630	33,088
1940	15	31,055	44,356	75,411	25,065	11,978	37,043	49,310	47,350
1941	16	43,912	58,186	102,108	36,821	20,281	57,102	68,930	65,254
1942	17	45,147	58,379	103,526	40,285	18,792	59,077	70,465	66,208
1943	18	33,286	47,604	80,890	27,531	11,782	39,313	51,755	47,510
1944	19	13,371	17,100	30,471	11,683	5,041	16,724	23,338	28,351

(2) 比良系事業場 (比良系川)

昭和									
1929	4	274	527	801	274	480	754	500	476
1930	5	736	570	1,306	647	281	928	1,590	1,430
1931	6	3,611	4,891	8,502	3,267	2,383	5,650	7,550	7,275
1932	7	898	1,651	2,549	834	701	1,535	1,800	1,720
1933	8	1,473	1,666	3,139	1,357	1,123	2,480	3,100	2,981
1934	9	649	857	1,506	617	599	1,216	1,425	1,353
1935	10	225	307	532	218	166	384	462	425
1936	11	449	585	1,034	422	361	783	882	811

年次	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
1937	昭和12	667	1,182	1,849	642	573	1,215	1,325	1,170
1938	13	241	482	723	228	190	418	500	485
1939	14	598	1,134	1,732	563	474	1,037	1,150	
1940	15	521	1,505	2,026	481	390	871	1,000	
1941	16	496	590	1,086	317	330	647	650	522
1942	17	527	331	858	301	230	531	700	
1943	18	676	979	1,655	350	400	750	750	
1944	19	72	52	124	66	40	106	150	

(藁取川)

昭和		♀	♂	計	♀	♂	計		
1934	9	1,299	2,349	3,648	1,186	1,339	2,525	2,575	
1935	10	1,349	1,713	3,062	1,284	923	2,207	2,350	
1936	11	1,540	1,731	3,271	1,132	993	2,125	2,400	
1937	12	3,126	5,392	8,518	2,934	2,627	5,561	6,000	
1938	13	2,260	4,433	6,693	2,124	1,907	4,031	4,600	
1939	14	2,312	4,650	6,962	2,108	1,758	3,866	4,300	
1940	15	2,173	6,067	8,240	1,995	1,660	3,655	4,100	
1941	16	5,637	14,060	19,697	2,409	3,282	5,691	4,950	
1942	17	2,626	7,608	10,234	1,902	2,102	4,004	4,350	
1943	18	7,376	10,704	18,080	1,983	2,760	4,743	4,300	
1944	19	4,929	12,267	17,196	985	814	1,799	2,200	

(3) 当路事業場(当路川) (当路湖)

明治		♀	♂	計	♀	♂	計		
1890	23	—	—	1,260	—	—	811	530	476
1891	24	—	—	493	—	—	337	180	144
1892	25	—	—	917	—	—	893	600	517
1893	26	—	—	1,420	—	—	879	740	626
1894	27	—	—	702	—	—	650	650	537
1895	28	—	—	1,233	—	—	1,075	700	678
1896	29	—	—	2,993	—	—	2,896	1,333	1,201
1897	30	—	—	1,030	—	—	951	1,251	1,159
1898	31	—	—	1,689	—	—	1,610	1,280	1,237
1899	32	—	—	1,759	—	—	1,449	1,176	1,153
1900	33	—	—	3,441	—	—	2,981	1,190	1,159
1901	34	—	—	1,882	—	—	1,622	1,117	—
1902	35	—	—	3,759	—	—	—	1,710	1,650
1903	36	—	—	2,962	—	—	—	2,708	1,510
1904	37	—	—	4,993	—	—	—	4,303	3,827
1905	38	—	—	252	—	—	—	219	194

年次	捕獲数			使用数			採卵数	放流数		
	♀	♂	計	♀	♂	計				
1906	明治	39	—	—	533	—	—	—	375	358
1907	40	—	—	—	976	—	—	—	433	394
1908	41	—	—	—	187	—	—	—	117	110
1909	42	—	—	—	965	—	—	—	578	555
1910	43	—	—	—	486	—	—	—	—	—
1911	44	—	—	—	2,726	—	—	—	—	—
1912	45	—	—	—	466	—	—	—	—	—
1913	大正	2	—	—	1,160	—	—	—	—	—
1914	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1915	4	1,387	963	2,350	740	661	1,401	1,413	1,272	
1916	5	506	400	906	234	109	443	434	390	
1917	6	1,372	1,450	2,822	890	1,339	2,229	2,086	1,878	
1918	7	688	752	1,440	419	424	843	904	886	
1919	8	2,106	1,480	3,586	1,424	1,220	2,644	3,683	3,577	
1920	9	1,763	1,227	2,990	1,749	1,222	2,971	3,715	3,579	
1921	10	1,163	483	1,646	1,129	419	1,548	2,316	2,173	
1922	11	2,392	1,858	4,250	2,291	1,404	3,695	5,026	4,523	
1923	12	3,015	3,213	6,228	2,742	1,624	4,366	5,320	5,003	
1924	13	1,814	2,005	3,819	1,618	1,739	3,357	4,135	3,785	
1925	14	366	395	761	312	265	577	700	671	
1926	15	1,385	1,451	2,836	957	714	1,671	2,020	1,928	
1927	昭和	2	1,094	967	2,061	861	670	1,531	1,820	1,736
1928	3	327	262	589	326	259	585	675	651	
1929	4	130	202	332	124	104	228	185	183	
1930	5	1,354	1,311	2,665	1,014	679	1,693	1,950	1,839	
1931	6	839	853	1,692	659	504	1,163	1,400	1,316	
1932	7	1,877	2,041	3,918	1,490	1,082	2,572	3,425	3,162	
1933	8	2,082	1,537	3,619	1,398	748	2,146	3,050	2,820	
1934	9	2,372	2,245	4,617	1,961	1,348	3,309	4,300	3,983	
1935	10	2,527	2,677	5,204	1,956	1,163	3,119	4,000	3,716	
1936	11	5,048	7,084	12,132	4,253	2,814	7,067	9,297	8,155	
1937	12	9,646	11,228	20,874	5,834	3,773	9,607	13,210	10,347	
1938	13	10,960	13,918	24,878	6,896	4,511	11,408	16,020	12,089	
1939	14	11,437	14,146	25,583	5,953	3,768	9,721	13,140	10,283	
1940	15	19,829	26,787	46,616	7,439	5,447	12,886	13,985	11,720	
1941	16	12,730	21,076	33,806	3,496	6,187	9,683	8,360	7,105	
1942	17	3,404	9,796	13,200	1,968	953	2,921	4,381	3,756	
1943	18	8,629	12,881	21,510	3,982	1,799	5,781	7,740	6,693	
1944	19	3,857	6,913	10,770	1,065	383	1,448	2,200	2,025	

## (4) 別飛事業場 (別様川)

年次	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数		
	♀	♂	計	♀	♂	計				
1928	昭和	3	4,887	5,676	10,563	4,477	1,589	6,066	8,485	7,510
1929	4	2,572	4,047	6,619	1,859	780	2,639	4,995	4,635	
1930	5	6,697	12,286	18,983	4,682	2,416	7,098	10,078	9,547	
1931	6	7,779	14,647	22,426	5,254	2,884	8,138	12,452	11,765	
1932	7	4,512	9,507	14,019	2,769	1,511	4,280	5,436	5,104	
1933	8	7,355	10,449	17,804	6,664	3,457	10,121	13,450	12,623	
1934	9	4,399	5,619	10,018	4,212	3,806	8,018	10,010	9,109	
1935	10	4,234	4,786	9,020	4,234	2,964	7,198	9,823	9,055	
1936	11	6,585	11,415	18,000	5,786	5,632	11,418	14,000	13,299	
1937	12	10,470	21,457	31,927	10,460	7,640	18,100	23,140	19,644	
1938	13	9,970	21,030	31,600	7,195	8,305	15,500	14,000	12,621	
1939	14	18,114	33,111	51,225	10,310	6,312	16,622	18,300	13,917	
1940	15	28,474	40,159	68,626	22,025	13,185	35,210	44,650	31,742	
1941	16	29,398	41,754	71,152	18,725	13,433	32,158	35,060	26,123	
1942	17	23,599	31,826	55,425	15,882	10,677	26,559	31,885	23,183	
1943	18	15,718	18,342	34,060	10,014	6,409	46,423	22,356	20,605	
1944	19	16,821	25,604	42,425	9,179	5,697	14,876	17,950	17,190	

## (5) 留別事業場 (留別川)

1911	明治	44	2,431	2,470	4,901	2,109	2,054	4,163	3,353	3,275
1912	45	3,323	3,092	6,415	2,915	2,654	5,569	6,438	6,000	
1913	大正	2	6,112	5,926	12,038	3,822	3,616	7,438	7,382	6,500
1914	3	1,728	2,482	4,210	1,046	1,455	2,501	2,203	2,105	
1915	4	3,467	3,579	7,046	3,147	3,366	6,513	4,191	3,994	
1916	5	239	743	982	201	393	594	302	286	
1917	6	1,389	1,547	2,936	1,389	1,443	2,832	1,962	1,854	
1918	7	369	1,304	1,673	322	459	781	515	445	
1919	8	4,591	2,478	7,069	4,240	2,236	6,478	7,075	6,429	
1920	9	4,853	6,673	11,526	2,692	2,959	5,651	6,295	5,974	
1921	10	1,503	1,130	2,633	849	863	1,712	2,215	2,097	
1922	11	3,355	5,126	8,481	2,161	2,052	4,213	6,061	5,916	
1923	12	7,291	6,677	13,968	4,459	3,264	7,723	9,292	6,494	
1924	13	5,629	4,008	9,637	1,265	617	1,882	2,839	1,800	
1925	14	2,132	2,449	4,581	771	412	1,183	1,718	1,106	
1926	15	15,006	14,443	29,449	5,250	2,031	7,281	11,454	7,707	
1927	昭和	2	2,635	2,695	5,330	1,169	537	1,706	3,125	2,933
1928	3	2,323	2,977	5,300	1,635	1,302	2,937	4,056	3,800	

年次	捕獲数			使用数			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
1929	昭和 4	2,932	2,756	5,688	2,368	1,733	4,101	5,575	5,034
1930	5	8,077	9,458	17,535	6,271	4,337	10,608	15,273	10,656
1931	6	8,399	7,955	16,354	7,351	3,963	11,314	17,715	13,506
1932	7	4,404	5,051	9,455	4,019	2,077	6,096	9,901	9,124
1933	8	5,582	5,309	10,891	4,645	2,386	7,031	11,616	10,328
1934	9	3,090	3,651	6,741	2,792	1,357	4,149	6,590	5,964
1935	10	3,976	4,832	8,808	3,622	1,515	5,137	8,907	8,166
1936	11	5,347	7,808	13,155	4,146	2,197	6,343	9,272	8,908
1937	12	10,757	12,053	22,810	9,223	4,727	13,950	20,715	19,810
1938	13	4,395	6,998	11,393	3,549	1,728	5,277	6,923	6,200
1939	14	8,630	8,486	17,116	7,538	3,470	11,008	15,435	13,964
1940	15	6,227	9,333	15,560	5,151	2,417	7,568	11,419	10,824
1941	16	9,495	13,185	22,680	7,116	3,324	10,440	16,907	15,661
1942	17	4,642	6,075	10,717	4,341	2,144	6,485	8,375	7,575
1943	18	8,370	9,553	17,923	3,256	1,999	5,255	6,340	5,594
1944	19	2,246	14,205	16,451	2,246	691	2,937	3,300	3,160

(6) 老門事業場 (老門川)

大正									
1923	12	4,564	5,135	9,699	3,342	3,851	7,193	8,038	7,591
1924	13	2,384	2,274	4,658	1,747	942	2,689	2,750	2,606
1925	14	2,195	2,166	4,361	1,714	899	2,613	4,772	4,304
1926	15	5,353	7,293	12,646	4,911	3,206	8,117	10,200	9,272
昭和									
1927	2	6,096	5,671	11,767	4,707	5,539	10,246	11,400	10,437
1928	3	1,407	1,322	2,729	1,157	1,218	2,375	2,725	2,513
1929	4	1,830	2,050	3,880	1,492	1,963	3,455	3,100	2,847
1930	5	1,240	1,903	3,143	972	1,159	2,131	1,600	1,533
1931	6	6,916	10,544	17,460	6,388	8,494	14,882	11,100	10,336
1932	7	2,269	2,603	4,872	2,201	2,264	4,465	3,500	3,329
1933	8	1,154	1,313	2,467	1,105	978	2,083	1,900	1,822
1934	9	2,783	6,455	9,238	2,783	1,915	4,698	6,087	5,799
1935	10	2,424	2,442	4,866	2,252	1,157	3,409	5,187	4,971
1936	11	1,352	1,413	2,765	1,266	631	1,897	3,015	2,864
1937	12	998	5,587	6,585	846	421	1,267	1,985	1,874
1938	13	3,766	8,954	12,720	3,511	1,756	5,267	8,405	7,857
1939	14	6,403	9,073	15,476	5,682	4,435	10,117	13,607	10,897
1940	15	5,750	6,338	12,088	5,349	4,612	9,961	13,342	10,927
1941	16	3,817	6,773	10,590	3,223	2,671	5,894	7,565	6,531
1942	17	5,272	8,388	13,660	3,161	2,295	5,456	8,587	7,747

年次	捕獲数			使用数			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
1943	昭和18	2,692	3,716	6,408	2,002	1,451	3,453	4,135	3,526
1944	19	1,637	3,107	4,744	1,283	839	2,122	3,550	2,504

(7) 羅臼事業場 (羅臼川)

年次	昭和	♀	♂	計	♀	♂	計	採卵数	放流数
1932	7	4,793	7,173	11,966	1,531	631	2,162	3,827	3,454
1933	8	4,357	6,536	10,893	2,111	787	2,898	4,813	4,763
1934	9	4,869	6,848	11,717	4,273	1,776	6,049	7,972	7,730
1935	10	2,179	3,466	5,645	2,179	771	2,950	5,000	3,833
1936	11	2,271	4,121	6,392	1,766	683	2,449	4,110	3,835
1937	12	4,354	7,944	12,298	3,691	1,567	5,258	8,340	6,625
1938	13	3,479	7,604	11,083	2,870	1,325	4,195	4,750	4,050
1939	14	3,812	12,688	16,500	3,472	1,729	5,201	7,800	5,631
1940	15	4,130	9,485	13,615	3,812	1,907	5,719	8,872	5,706
1941	16	5,890	13,553	19,443	5,063	2,592	7,655	11,987	8,837
1942	17	4,161	11,886	16,047	3,256	1,710	4,966	8,734	7,715
1943	18	2,356	7,983	10,339	2,134	942	3,076	5,036	4,140
1944	19	1,087	5,634	6,721	884	418	1,302	1,971	1,883

(8) 年崩事業場 (年崩川)

年次	昭和	♀	♂	計	♀	♂	計	採卵数	放流数
1933	8	1,458	2,156	3,614	723	442	1,165	1,700	1,486
1934	9	2,283	4,635	6,918	1,740	869	2,609	4,300	4,151
1935	10	1,309	2,058	3,369	1,095	603	1,698	2,640	2,587
1936	11	1,359	1,424	2,783	469	274	743	1,075	1,020
1937	12	2,399	4,345	6,744	1,873	1,049	2,922	3,500	2,687
1938	13	4,583	10,940	15,523	2,317	1,340	3,657	4,250	3,902
1939	14	3,046	5,701	8,747	2,121	945	3,066	4,500	3,853
1940	15	4,783	8,792	13,575	4,530	1,514	6,044	3,300	2,703
1941	16	3,530	5,595	9,125	3,291	998	4,289	4,000	3,290
1942	17	2,235	3,903	6,138	2,035	942	2,977	3,100	2,956
1943	18	3,061	4,297	7,358	2,655	586	3,241	5,030	3,769
1944	19	133	724	857	133	17	150	400	382

(9) 有崩事業場 (有崩川)

年次	昭和	♀	♂	計	♀	♂	計	採卵数	放流数
1927	2	5,175	2,705	7,880	5,119	2,585	7,704	9,710	8,711
1928	3	3,214	2,998	6,212	3,067	2,756	5,823	6,047	5,218
1929	4	1,342	1,292	2,634	1,266	1,223	2,489	3,087	2,424

年次	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
1930	昭和 5	517	453	970	473	329	802	1,020	938
1931	6	1,515	1,476	2,991	1,406	1,174	2,580	3,552	2,874
1932	7	1,082	1,146	2,228	999	637	1,636	2,125	2,044
1933	8	508	324	832	478	104	582	1,115	1,038
1934	9	1,184	1,517	2,701	1,066	496	1,562	2,284	2,150
1935	10	2,087	4,208	6,295	1,853	951	2,804	3,735	3,505
1936	11	1,302	1,981	3,283	1,224	645	1,869	2,590	2,331
1937	12	828	1,481	2,309	686	415	1,101	1,465	1,352
1938	13	1,854	4,497	6,351	1,958	858	2,816	3,357	2,700
1939	14	1,525	9,312	10,837	1,239	1,086	2,325	2,142	—
1940	15	3,736	6,319	10,055	2,635	1,147	3,782	4,543	—
1941	16	1,180	2,083	3,263	900	513	1,413	1,793	—
1942	17	2,016	2,716	4,732	1,624	775	2,399	3,115	—
1943	18	5,338	7,715	13,053	4,114	1,757	5,871	9,042	—
1944	19	4,153	5,522	9,675	3,151	1,586	4,737	6,730	—

## 2. からふとます

### (1) 扱扱支場 (紗那川)

	大正								
1920	9	3,965	5,434	9,399	3,056	2,962	6,018	2,832	2,190
1921	10	6,963	9,350	16,313	4,827	4,450	9,277	8,040	6,953
1922	11	8,127	15,444	23,571	5,097	2,879	7,976	7,590	7,255
1923	12	2,274	6,145	8,419	966	879	1,854	1,455	1,402
1924	13	2,465	11,525	13,990	1,600	1,425	3,025	2,202	2,052
1925	14	11,641	24,896	36,537	4,200	2,100	6,300	6,390	5,802
1926	15	4,680	20,320	25,000	2,920	1,578	4,498	4,260	3,939
	昭和								
1927	2	5,742	16,658	22,400	2,980	2,986	5,066	4,380	4,124
1928	3	4,040	11,380	15,420	3,220	2,045	5,265	4,320	4,016
1929	4	8,230	12,770	21,000	7,200	4,330	11,530	10,500	9,755
1930	5	655	1,645	2,300	603	425	1,028	873	766
1931	6	4,729	14,030	18,759	4,496	884	5,380	7,164	6,221
1932	7	734	4,562	5,296	680	280	960	1,746	1,575
1933	8	764	4,729	5,493	716	309	1,025	1,290	—
1936	11	6,239	21,350	27,589	6,127	3,197	9,324	9,357	—
1937	12	7,609	14,196	21,805	7,547	4,233	11,780	11,307	—
1938	13	7,444	15,113	22,557	7,097	3,617	10,714	11,070	—
1939	14	3,194	6,273	9,467	2,373	1,231	3,604	4,092	—
1940	15	3,591	4,777	8,368	3,016	1,269	4,285	4,524	—

年次	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
昭和									
1941	16	9,973	21,712	31,685	6,087	3,170	9,257	7,908	—
1942	17	5,536	9,045	14,581	4,667	2,214	6,881	5,919	—
1943	18	22,746	36,479	59,225	10,395	5,109	15,504	15,375	—

(2) 比良糸事業場 (比良糸川)

年次	昭和	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数
		♀	♂	計	♀	♂	計		
1929	4	828	549	1,375	826	549	1,375	1,250	1,217
1930	5	649	1,240	1,889	614	127	741	1,030	999
1931	6	531	1,019	1,550	405	650	1,055	550	525
1932	7	947	1,630	2,577	850	1,131	1,981	1,250	1,200
1933	8	2,246	5,763	8,009	2,075	1,826	3,901	2,600	—
1936	11	398	932	1,330	388	350	738	570	—
1937	12	501	1,952	2,453	472	375	847	720	—
1938	13	564	1,923	2,485	530	325	855	810	—
1939	14	982	3,179	4,161	891	656	1,547	1,440	—
1940	15	127	553	680	114	80	194	180	—
1941	16	90	100	190	60	50	110	60	—
1942	17	550	990	1,540	310	200	510	440	—
1943	18	1,110	2,090	3,200	805	800	1,605	1,120	—

薬取川 (シベトロ川)

年次	昭和	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数
		♀	♂	計	♀	♂	計		
1936	11	1,600	5,964	7,564	1,449	1,263	2,712	2,220	—
1937	12	2,572	10,602	13,174	2,360	1,888	4,248	3,600	—
1938	13	4,402	15,394	19,796	4,181	3,135	7,316	6,360	—
1939	14	1,816	6,010	7,826	1,611	1,290	2,901	2,640	—
1940	15	1,554	5,870	7,424	1,330	920	2,250	2,070	—
1942	17	7,640	24,419	32,059	3,449	2,580	6,029	4,780	—
1943	18	9,290	48,410	57,700	4,560	5,950	10,510	6,030	—
1944	19	295	465	760	224	216	440	270	—

(3) 当路事業所 (当路湖)

年次	昭和	捕獲数計			使用数計			採卵数	放流数
		♀	♂	計	♀	♂	計		
1932	7	754	963	1,717	406	287	693	402	375
1933	8	719	871	1,590	575	373	948	635	—
1936	11	2,154	3,866	6,020	1,578	527	2,105	2,040	—
1937	12	3,780	5,040	8,820	1,571	668	2,239	2,040	—
1938	13	2,118	2,369	4,487	1,549	823	2,372	2,115	—
1939	14	1,610	2,567	4,177	1,073	562	1,635	1,434	—

年次	捕獲数			使用数			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
昭和									
1940	15	1,159	1,557	2,716	797	452	1,249	1,005	—
1941	16	256	679	935	178	70	248	274	—
1942	17	1,404	2,373	3,777	389	177	566	750	—
1943	18	2,637	4,279	6,916	984	455	1,439	1,922	—

(4) 飛別事業場 (別様川)

昭和									
1929	4	9,067	21,073	30,141	5,371	1,967	7,338	8,496	7,726
1930	5	1,445	4,236	5,681	1,193	579	1,772	2,016	1,799
1931	6	2,663	3,088	5,751	2,470	1,200	3,670	4,038	3,725
1932	7	888	1,562	2,450	595	367	962	1,104	1,012
1933	8	1,296	1,999	3,295	1,125	557	1,682	1,686	1,594
1936	11	7,630	7,180	14,810	5,975	2,690	8,665	8,553	—
1937	12	5,870	29,580	35,450	2,890	4,110	7,000	8,289	—
1938	13	5,160	27,640	32,800	3,420	5,470	8,890	9,669	—
1939	14	6,717	14,408	21,125	3,648	2,223	5,871	5,201	—
1940	15	4,441	7,934	12,375	3,497	2,086	5,583	5,400	—
1941	16	9,985	9,188	19,173	5,227	3,211	8,438	8,217	—
1942	17	8,710	18,215	26,925	5,746	3,507	9,253	11,029	—
1943	18	15,061	36,174	51,235	12,080	7,666	19,746	21,570	—

(5) 留別事業場 (留別川)

大正									
1913	2	2,626	1,960	4,586	866	821	1,687	2,362	2,118
1914	3	154	214	368	45	76	121	70	61
1915	4	3,264	3,362	6,626	2,709	2,551	5,260	4,764	4,527
1917	6	3,307	5,987	9,294	3,307	3,974	7,281	4,080	3,851
1918	7	89	261	350	89	109	198	175	144
1919	8	13,749	16,965	30,624	11,284	14,284	25,568	10,013	9,036
1920	9	8,968	14,252	23,220	5,948	6,252	12,200	7,639	7,167
1921	10	10,360	17,878	28,238	7,354	8,219	15,573	11,770	11,179
1922	11	10,591	20,834	31,425	7,380	7,720	15,100	9,221	8,762
1923	12	5,712	13,478	19,190	4,145	2,790	6,935	6,915	6,613
1924	13	4,439	38,359	45,298	676	624	1,300	1,072	1,031
1925	14	39,725	74,451	114,176	8,575	3,827	12,402	16,044	12,562
1926	15	7,403	16,164	23,567	2,768	1,542	4,310	4,179	3,773
昭和									
1927	2	6,364	21,529	27,893	5,862	2,408	8,270	8,475	6,261
1928	3	11,731	32,987	44,718	8,421	6,305	14,726	12,600	9,642

年次	捕獲数			使用数			採卵数	放流数	
	♀	♂	計	♀	♂	計			
昭和									
1929	4	22,951	27,591	49,542	21,577	21,181	42,758	35,965	27,371
1930	5	5,251	22,843	28,094	4,186	3,081	7,267	6,519	6,147
1931	6	11,862	24,374	36,236	11,350	5,953	17,303	18,144	17,454
1932	7	8,520	12,913	21,433	6,335	2,905	9,240	8,823	7,871
1933	8	17,594	30,810	48,404	16,024	8,261	24,285	30,567	29,387
1936	11	8,520	13,266	21,786	8,255	4,322	12,577	14,526	—
1937	12	11,935	9,547	21,482	9,199	4,456	13,655	15,903	—
1938	13	4,520	6,349	10,869	4,283	2,014	6,297	7,179	—
1939	14	1,775	8,411	10,186	1,539	835	2,374	2,790	—
1940	15	3,454	9,336	12,790	3,170	1,620	4,790	5,559	—
1941	16	11,380	20,390	31,770	10,085	4,655	14,740	17,000	—
1942	17	8,707	13,680	22,387	7,909	4,002	11,911	8,007	—
1943	18	20,786	12,847	33,633	19,832	9,903	29,735	21,600	—
1944	19	1,068	2,266	3,334	1,012	294	1,306	1,780	—

(6) 老門事業場 (老門川)

昭和									
1936	11	831	1,693	2,524	717	349	1,066	1,008	—
1937	12	3,619	2,730	6,349	3,422	1,676	5,098	5,052	—
1938	13	3,206	3,377	6,583	3,081	1,416	4,497	4,515	—
1939	14	2,902	5,257	8,159	2,296	706	3,002	2,805	—
1940	15	2,141	1,577	3,718	1,929	649	2,578	2,670	—
1941	16	1,629	1,548	3,177	1,371	545	1,916	1,671	—
1942	17	2,235	2,144	4,379	1,905	849	2,754	2,583	—
1943	18	3,160	4,046	7,206	2,624	959	3,583	3,234	—

(7) 有崩事業場 (有崩川)

昭和									
1936	11	399	1,185	1,584	387	204	591	603	—
1937	12	1,447	2,469	3,916	1,414	794	2,208	2,100	—
1938	13	301	349	650	294	163	457	492	—
1939	14	524	1,114	1,638	398	244	642	357	—

(8) 年崩事業場 (年崩湖)

昭和									
1933	8	63	147	210	65	37	100	112	—
1936	11	856	2,644	3,500	732	444	1,176	1,250	—
1937	12	1,434	6,461	7,895	749	463	1,212	2,650	—

年次	捕獲数			使用数			採卵数	放流数
	♀	♂	計	♀	♂	計		
昭和								
1938	13	1,760	9,105	10,865	856	469	1,325	1,250
1939	14	318	490	808	277	74	351	344
1940	15	938	2,277	3,215	871	368	1,239	1,680
1941	16	188	465	653	90	51	141	89
1943	18	563	918	1,481	463	161	624	275

(9) 羅臼事業場 (羅臼沼)

昭和								
1936	11	1,291	789	2,080	1,218	437	1,655	1,800
1937	12	211	282	493	157	61	218	240
1938	13	128	239	367	100	54	154	156
1943	18	95	285	380	70	29	99	105

3. ベにさけ

ウルモベツふ化場

大正								
1916	5	1,454	1,533	2,987	1,269	559	1,828	2,530
1917	6	3,364	1,655	5,019	2,924	861	3,785	7,995
1918	7	5,098	4,740	9,838	4,460	1,366	5,826	13,624
1919	8	941	665	1,606	851	113	964	3,009
1920	9	6,101	3,387	9,488	4,576	748	5,324	14,238
1921	10	14,369	7,718	22,087	12,596	2,714	15,310	40,220
1922	11	5,901	3,481	9,382	5,245	1,845	7,090	17,384
1923	12	—	—	27,156	15,240	4,994	20,234	52,156
1924	13	—	—	18,984	10,672	5,212	15,884	36,015
1925	14	—	—	11,403	6,194	2,409	8,603	20,002
1926	15	—	—	32,105	16,593	6,352	22,945	55,260
昭和								
1927	2	20,673	15,078	35,751	17,914	6,207	24,121	60,080
1928	3	4,823	3,998	8,821	4,384	2,038	6,422	14,420
1929	4	8,204	3,886	12,090	7,041	2,625	9,666	23,128
1930	5	436	272	708	400	166	566	1,260
1931	6	520	242	762	511	181	692	1,653
1932	7	5,786	2,916	8,702	4,594	1,609	6,203	14,287
1933	8	2,568	1,342	3,910	2,452	875	3,327	7,840

附表 2

国後支場さけ・ますふ化事業成績

1. さけ

場名	年度	捕獲数			使用親魚数			採卵数	放流数	摘要
		♀	♂	計	♀	♂	計			
国後	明治	尾	尾	尾	尾	尾	尾	粒	尾	
	33	953	883	1,836	380	533	913	633,600	440,780	
	34	2,440	2,179	4,619	948	939	1,887	1,156,800	1,007,540	
	35	3,225	3,074	7,299	2,288	3,074	5,362	3,072,000	2,633,698	
	36	6,232	3,384	9,616	2,848	2,929	5,777	3,840,000	3,131,206	
	37	2,525	249	2,774	1,982	1,895	3,877	3,313,200	2,798,802	
	38	2,063	371	2,434	1,654	2,143	3,797	3,154,000	3,011,322	
	39	4,183	731	4,914	3,115	3,224	6,339	4,908,600	4,398,581	
	40	3,426	444	3,870	2,982	3,764	6,746	4,268,800	2,820,800	
	41	2,360	187	2,547	2,173	1,481	3,654	3,500,000	3,189,660	
	42	5,461	1,449	6,910	4,012	3,288	7,300	5,086,000	4,706,512	
	43	4,742	4,852	9,594	3,775	4,244	8,019	4,450,000	4,114,411	
	44	6,438	7,075	13,513	4,852	7,075	11,927	5,400,000	5,015,153	
	大正	元	4,669	5,364	10,033	3,665	5,294	8,959	4,320,000	4,022,678
2		7,110	8,254	15,364	5,894	8,254	14,148	6,120,000	5,707,562	
3		6,662	8,859	15,521	5,395	8,859	14,254	5,742,000	5,103,910	
4		8,033	6,902	14,935	4,500	5,853	10,353	5,067,400	4,271,500	
5		4,895	3,072	7,967	2,907	3,150	6,057	3,885,000	3,421,000	
6		2,006	3,459	5,465	1,820	2,525	4,345	3,096,000	2,686,570	
7		4,423	4,909	9,332	3,689	4,257	7,946	5,742,000	4,976,120	
8		7,814	9,491	17,305	6,221	7,814	14,035	10,000,000	8,724,100	
9		11,995	13,057	25,052	7,870	9,412	17,282	12,069,000	10,478,820	
10		3,484	3,586	7,070	3,053	3,326	6,379	6,109,200	5,541,360	
11		7,782	8,861	16,643	6,109	6,789	12,898	11,793,600	10,752,800	
12		11,068	14,062	25,130	8,211	9,788	17,999	15,280,000	14,105,030	
13		5,541	5,620	11,161	3,532	3,513	7,045	6,409,800	5,912,300	
14		6,558	7,057	13,615	3,808	4,282	8,090	7,292,000	6,600,730	
昭和	元	7,574	7,922	15,496	5,288	4,980	10,268	9,838,000	9,061,750	
	2	6,679	7,183	13,862	4,643	4,731	9,374	9,246,000	8,622,270	
	3	4,309	4,620	8,929	3,284	3,094	6,378	6,500,000	6,178,860	
	4	5,791	4,536	10,327	4,461	3,071	7,532	9,408,000	8,990,720	
	5	6,165	6,419	12,584	4,358	3,683	8,041	7,492,000	6,877,940	
	6	8,929	9,222	18,151	5,292	4,049	9,341	10,532,000	9,822,729	
	7	8,360	8,128	16,488	3,718	2,745	6,463	6,363,000	5,937,820	
	8	11,265	11,191	22,456	4,354	3,338	7,692	9,554,000	8,890,870	
	9	10,632	12,552	23,184	7,471	5,398	12,869	14,300,000	13,487,260	

場名	年度	捕獲数			使用親魚数			採卵数	放流数	摘要
		♀	♂	計	♀	♂	計			
国後	昭和10	14,049	14,390	28,439	9,102	5,556	14,658	18,332,000	15,980,630	1,00,000粒 泊外, 二ヶ所へ移植
	11	13,945	19,404	36,349	9,817	6,421	16,238	20,537,500	17,880,620	
	12	11,785	16,492	28,277	8,672	5,016	13,688	19,175,000	18,164,650	
	13	4,734	6,170	10,904	4,401	2,659	7,062	8,675,000	8,248,040	1,600,000粒 二木城 外, 一ヶ所へ移植
	14	5,359	6,211	11,570	4,618	2,489	7,607	9,325,000	8,592,985	
	15	7,373	9,435	16,808	6,583	3,484	10,067	13,600,000	12,650,490	
	16	16,024	16,479	32,503	9,370	5,301	14,671	20,454,600	18,137,180	
	17	16,413	9,293	23,706	10,289	5,201	15,490	20,237,800	?	
	18	8,746	7,853	16,599	6,364	3,429	9,793	12,436,000	11,711,430	
	19	9,351	11,619	20,970	4,278	2,437	6,715	10,140,000		

二木城大正

4	2,474	4,992	7,466	2,241	3,065	5,306	4,096,000	3,683,030
5	2,216	2,414	4,630	1,677	1,786	3,463	3,254,000	3,709,628
6	2,692	2,868	5,560	1,950	2,408	4,358	3,907,600	3,678,272
7	4,649	5,414	10,063	2,956	3,329	6,285	4,360,000	4,078,574
8	4,210	4,660	8,870	2,529	3,119	5,648	4,608,000	4,236,806
9	5,443	5,880	11,323	2,699	3,694	6,393	4,608,000	4,263,815
10	898	960	1,858	790	855	1,645	1,591,200	1,520,277
11	5,114	5,993	11,107	2,994	3,963	6,957	6,028,200	5,418,836
12	6,279	6,890	13,169	3,783	5,129	8,912	7,171,200	6,719,936
13	2,141	2,473	4,614	1,483	1,935	3,418	2,979,000	2,764,737
14	2,812	3,045	5,857	1,330	1,873	3,202	2,669,400	2,495,723
昭和								
元	5,134	6,948	12,082	4,745	6,679	11,424	9,648,000	8,986,723
2	2,155	2,217	4,372	1,498	2,072	3,570	2,813,400	2,625,136
3	526	461	987	331	327	658	615,600	571,761
4	1,425	1,261	2,686	1,198	1,120	2,318	2,048,400	1,930,250
5								
6								
7								
8	421	381	802	345	303	648	480,000	453,760
9	1,460	1,508	2,968	1,064	633	1,697	2,000,500	1,920,442
10	1,967	1,769	3,736	1,648	1,063	2,711	4,200,000	4,001,290
11	3,210	2,928	6,138	2,667	1,543	4,210	5,430,000	5,202,190
12	4,859	4,912	9,771	3,574	2,154	5,728	7,250,000	6,865,300
13	6,912	5,340	12,262	5,181	3,037	8,218	10,010,000	9,302,500
14	2,920	2,236	5,156	2,386	1,414	3,800	4,575,000	4,359,900
15	3,770	3,285	7,055	3,180	1,980	5,160	6,300,000	5,899,100
16	6,139	7,541	13,680	3,590	2,303	5,893	6,525,000	6,151,710

休業

場名	年度	捕獲数			使用親魚数			採卵数	放流数	摘要
		♀	♂	計	♀	♂	計			
二木城	昭和									
	17	7,748	7,894	15,642	3,481	1,068	4,549	6,900,000	6,186,970	
	18	2,778	2,922	5,700	2,255	962	3,217	4,500,000	3,910,000	
	19	10,269	12,590	22,855	3,264	1,116	4,380	6,700,000	3,950,150	
音根別	明治									
	38			2,260	862	1,012	1,874	1,659,300	1,277,661	
	39			892	477	404	881	1,229,700	959,166	
	40			802	242	518	760	477,000	396,540	
	41									休業
	42			2,420	687	872	1,559	1,376,400	1,046,064	
	43			1,032	236	450	686	481,000	409,360	
	44			1,379	513	606	1,119	1,111,200	910,080	
	大正									
	元			7,578	2,469	3,715	6,184	4,979,600	3,884,088	
	2			3,703	1,428	1,920	3,348	2,856,600	2,618,531	
	3			1,917	771	919	1,690	1,182,400	954,494	
	4			923	92	207	299	180,000	151,549	
	5			257	61	65	126	70,000	61,466	
6			254	47	51	98	107,400	100,426		
7			2,175	440	231	671	952,000	881,000		
8			1,469	384	251	653	830,400	745,000		
9			948	210	366	576	315,200	297,500		
10			844	146	563	709	236,300	224,144		
11			2,206	394	708	1,102	832,500	483,877		
12			1,963	479	1,145	1,624	724,720	680,041		
13			481	110	256	366	153,000	140,251		
14			641	144	339	483	224,200	207,750		
昭和	元									
	2									休業
	3									
	4									
	5	287	538	825	140	230	370	235,500	226,888	
	6	832	1,817	2,649	711	893	1,604	1,737,000	1,788,156	
	7	471	1,275	1,746	404	270	674	1,017,500	989,320	
	8	194	493	687	154	118	272	367,850	356,900	
	9	647	1,832	2,479	487	246	733	1,125,000	1,085,790	
	10	1,822	3,078	4,920	1,225	480	1,705	2,863,500	2,755,970	
	11	857	1,141	1,998	662	452	1,114	1,622,500	1,545,380	
	12	749	792	1,541	632	390	1,026	1,430,000	1,364,780	

場名年度	捕獲数			使用親魚数			採卵数	放流数	摘要
	♀	♂	計	♀	♂	計			
音根別 昭和									
13	1,493	1,978	3,471	1,251	982	2,233	2,765,000	2,633,950	
14	2,433	3,021	5,454	1,836	1,085	2,921	4,075,000	3,867,680	
15	2,667	2,941	5,608	2,031	1,488	3,519	4,500,000	4,270,090	
16	3,228	3,059	6,287	2,425	1,591	4,016	5,385,000	5,097,250	
17	1,718	1,991	3,709	1,312	962	2,274	2,850,000	2,725,780	
18	5,590	6,613	12,203	3,443	3,032	6,475	8,000,000	7,601,120	
19	4,351	5,193	9,544	1,221	964	2,185	2,935,000	2,803,000	

泊 大正									
10	95	205	300	65	95	160	146,500	34,756	
11	604	989	1,593	526	905	1,431	1,024,000	946,800	
12	1,084	1,537	2,621	860	1,500	2,360	1,546,200	1,460,760	
13	1,179	1,487	2,666	839	1,124	1,963	1,303,400	1,232,250	
14	1,334	1,260	2,594	1,130	1,089	2,219	2,034,000	1,889,900	
昭和									
元	1,305	1,720	3,125	1,219	1,495	2,714	2,194,200	2,013,600	
2	1,370	1,485	2,855	1,149	1,205	2,354	2,068,200	1,896,800	
3	150	186	336	107	69	176	214,000	193,000	
4	899	807	1,706	792	563	1,355	1,584,000	1,424,600	
5	1,500	1,566	3,066	1,313	1,098	2,411	2,488,350	2,225,780	
6	671	335	1,006	580	245	825	1,109,600	955,100	
7	87	78	165	66	44	110	135,850	129,418	
8	300	278	572	231	138	369	458,000	432,000	
9	798	848	1,646	738	359	1,097	1,410,650	1,334,478	
10	280	418	698	265	144	409	1,128,000	1,076,260	500,000粒 國後支場 上り降産
11	634	659	1,283	479	242	721	1,956,000	1,849,610	
12	956	929	1,885	859	506	1,365	1,668,000	1,582,050	
13	895	1,062	1,957	772	435	1,207	1,389,600	1,321,780	
14	662	671	1,333	517	283	800	1,019,000	967,900	
15	846	822	1,668	555	310	865	1,019,500	965,500	
16	1,002	809	1,811	709	387	1,096	1,207,500	1,147,190	
17	844	929	1,773	531	285	816	952,500	903,360	
18	707	722	1,429	451	262	713	812,500	772,483	
19	1,943	1,590	3,533	721	428	1,149	1,317,500	1,250,330	

温根沼 昭和									
7	305	204	509	155	142	297	318,600	283,703	
8	150	113	263	66	33	99	135,000	116,851	
9	548	302	850	225	89	314	460,000	430,390	
10									

場名	年度	捕獲数			使用親魚数			採卵数	放流数	摘要
		♀	♂	計	♀	♂	計			
温根沼	昭和									
	11									
	12	302	256	558	160	91	251	340,000	317,450	
	13	463	459	922	429	156	585	1,066,300	1,000,000	
	14	509	503	1,012	484	176	660	1,202,500	1,130,200	
	15	445	958	1,403	405	146	551	900,000	842,070	
	16	1,025	1,550	2,575	878	314	1,192	2,162,000	1,563,000	
	17	920	1,248	2,168	695	248	943	1,700,000	1,335,000	
	18									
19	888	1,420	2,308	632	225	857	1,207,500	1,839,940		

## 2. からふとます

温根沼	昭和									
	13	130	203	333	112	41	153	148,500	140,580	
	14	86	53	139	82	31	113	100,000	94,600	
	15	1,017	1,186	2,203	831	302	1,251	1,555,000	1,467,745	
16	591	1,231	1,822	520	180	700	700,000	665,470		

音根別	昭和									
	5	617	1,426	2,043	308	523	831	503,500	136,040	
	6	33,140	64,574	97,714	3,051	2,381	5,432	4,500,000	468,737	
	7	1,447	2,796	4,243	332	414	746	502,300	471,450	
	8	46,985	72,581	119,566	2,671	2,072	4,743	4,225,000	4,048,730	
	9	2,307	2,347	4,654	401	208	609	610,000	589,435	
	10	3,098	8,321	11,419	2,552	769	3,321	3,165,000	3,014,140	
	11	857	1,141	1,998	662	452	1,114	1,622,500	1,545,380	
	12	1,164	2,570	3,734	1,020	549	1,569	1,387,500	1,320,870	
	13	,981	1,018	1,999	924	470	1,394	1,225,000	1,163,590	
	14	1,208	1,307	2,515	1,036	596	1,632	1,387,500	1,310,830	
	15	171	250	421	118	93	211	180,000	167,600	
	16	806	821	1,627	744	521	1,265	962,500	916,700	
17	405	370	775	367	202	569	485,000	463,450		